

---

# MONSTER HUNTER第二章～創痕の騎士、樹海を駆ける～

後藤正人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MONSTER HUNTER第二章「創痕の騎士、樹海を駆ける」

### 【Nコード】

N0037M

### 【作者名】

後藤正人

### 【あらすじ】

人は傲慢である。ただ一つの樹を眺めた、それだけで森のすべてを知ったと思ひ込む。森の先にはさらに森が広がり、山を越えればさらに山々が連なっていることを目にするだけである。人は知るのだ。一つのことを知ると、そのさらに先に知らないものがあることを知ることになるのだと。太古の巨龍の寝息が、今樹海を白く染め上げる。

## 第一話「創痕の騎士と樹海の主」（前書き）

この作品は、モンスターハンターの二次創作であるとともに、「紅衣の女中、砂漠に行く」という作品の続編にあたります。特に読んでいなければならぬということもありませんので、創痕の騎士からでも十分にご覧いただけます。

今作では、もう少し真面目な狩猟風景でも書こうと考えています。

## 第一話「創痕の騎士と樹海の主」

まだ、この場所に名前は無い。

名前をつけるという行為自体、人固有の習性である以上、誰にも知られていないこの場所を名前でもって呼ぶ者はいない。

位置は知られている。それは、樹海と呼ばれる、数多の木々が織りなす森のどこか。

人が決して踏み入れたことのない場所にて、主は情眠を貪っていた。

立ち並ぶ樹は主の姿を覆い隠しながら天へと伸びる。高く幹を生やし、他を押し退けながら葉を張り巡らせる。

木々は獲物を待ちかまえていた。自らの生長に欠くことのできない陽光をその広い葉で罨を張り、訪れた哀れな犠牲者を無遠慮に喰い散らかす。

樹木の悪食から逃れることができたわずかな生き残りだけが、木漏れ日として地表へ届く。

その光は主の体に降りかかるも、それは一部を照らすでしかない。

犠牲者の陳情をその身に受けながら、主はただただ眠り続ける。

樹海は、樹の海と呼ばれるだけあって一面樹ばかりである。しかし、足の踏み場もないほど樹が密生しているわけではない。よほど奥深くにまで立ち入れば話は別だろうが、浅い場所では樹が生えている場所の方が少ないものだ。

時折大樹が生えては、その枝を広げて日の光を柔らかなものに変えてくれる。

小鳥のさえずりが聞こえる森の中、アプトノスが引く荷馬車が三台、縦に並んでいる。

先頭の馬車には男が並んで御者席に座っている。

一人は中年の男である。恰幅のよい体つきでありながら器用な手綱さばきでアプトノスに指示を送っている。如何にも慣れた様子で、口元の無精ひげは旅そのものに親しんでいるような落ち着きを感じさせる。

その隣りには男が一人。まだ若い。少年と呼ばれる歳はとうに越しているが、落ち着きなく辺りを見回すその様子は妙に子どもじみている。

「メリクリウス商隊長、今何か聞こえませんでしたか？」

若者、ヘルメスは隣りのメリクリウスの袖を掴む。

すでに同じようなことが幾度もあったのだろう。メリクリウスはうっとおしそくにその手を振り払う。

「ランポスか何かだろ。そう心配するな」

鳥竜種ランポス。肉食性で集団で狩りを行う小型種である。確かに会いたい相手ではないだろうが、この程度の相手に怯えていたら切りがない。

お前はいつになったら商隊を任せられるようになるのか。そうメリクリウスが怒鳴ろうとした時のこと。この壮年の男も異常に気づいた。

先ほどまで聞こえていたはずの鳥の声がいつの間にか聞こえなくなっていたのだ。

アプトノスの足音と揺られる馬車の音。森からは何も聞こえてこない。

少しの音も聞き逃すまいとメリクリウスとヘルメスは揃って体の動きを止めた。付近を見回すため、目だけが左右に動いている。

その時のことである。

重苦しい音が胸を叩く。まるで巨大な何かの足音のようなあれは、二人にとって足音以外の何者にも聞こえることはなかった。

「やっぱり何かいますよ！」

やかましくわめくヘルメス。その声さえ塗りつぶして、大きな声が森を震わせる。

小鳥どころではない。ランポスが何頭揃えばこんな声を出せるというのか。

怯えたアプトノスがデタラメに走り出す。馬車が軋む。メリクリウスが手綱を強く握りしめるが、アプトノスが命令に応じる様子はない。

「竜が住み着いたなんて話、聞いてないぞ！」

こう叫んだ瞬間、手綱が強く引つ張られ、メリクリウスの体は宙へと投げ出された。

道を塞ぐように茂っていたツタ状の植物が荒々しく引きちぎられる。深緑の安寧を文字通り引き裂いたのは、鎧を身につけた男だった。

青というより蒼い。どこか緑がかっていないながらも青であることを譲ろうとしない鱗、甲殻を繋ぎ合わせた鎧である。

リオソウル。

蒼火竜と呼ばれる、飛竜の王とまで呼ばれる火竜の中でも珍しい亜種の素材をふんだんに使用したその鎧は、ただあるというだけで装備者の実力と実績をひけらかす。

男の名はアレス。やはり蒼火竜の素材を使用したランスを背負い、「夢狩り人」の通り名を持つハンターである。アレスなら夢の中でさえ狩りに行っているのではないか。そんな由来を持つ通り名にふさわしく、兜に隠れた視線は一切の油断を感じさせない。

一部の隙もない確かな足取りが、ふと止まり、アレスは振り返った。

「どうした、坊主？ 樹海には慣れてるんじゃないのか？」

決して大声ではないが、妙に人の耳に届く声である。

アレスの視界の先では、道を塞ぐ、ほんの腰ほどしかない岩を、それでもかじりつくように上る少年の姿があった。

こちらはなめした皮を繋ぎ合わせただけの質素な出で立ちである。ハンター装備。その作り安さと利便性から駆け出しのハンターなら世話になるものも多いが、熟達したハンターが使用することはまずない。

要するに、その程度の装備である。

ハンター装備の場合、兜は帽子と呼んで差し支えない。さらけ出された顔は、汗と疲れが滲んでいる。その瞳はまだ子どもらしさを残して大きく、帽子の隙間から伸びているその髪は薄い金髪をしている。

ヴァルカンと名乗るこの少年は、とてもひよっこと言う言葉が似合う。

「う、うるせー……」

精一杯の虚勢をはるが、岩を乗り越えたところでヴァルカンはその場に座り込んでしまった。

その側には、この旅、最後の同行者である少女が一人。

何とも不思議な娘である。赤いベストに赤いスカート。スカートには清潔感のある白いエプロンが備えられている。主に城や屋敷に使える女中の姿であり、メイドと呼ばれる衣類であった。

しかし、この少女の背では禍々しいとも毒々しいとも言える紫色の甲殻で造られた大型銃器が鈍い光沢を放っている。

メイド服とはアンバランスなヘビィボウガンに、ヘビィボウガンにさらに不釣り合いな微笑みをこのメイド、アマランサスは浮かべている。

「ほら、ファイト、ファイト」

励ましの声をかけているのはヴァルカン少年。

まだ整い切れていない息の合間に、ヴァルカンは返事をする。

「何でそんな服着て……、そんな化け物なんだよ……」

このメイドは、ヴァルカンと同じ道をたどっているのである。それも、ヴァルカンが背に固定している片手剣のような軽量の武器とは違う、重量級に属するヘビィボウガンを担いで。

アマランサスは息切れ一つ起こしていないどころか、その微笑みは怖いくらいに眩しい。

そう、怖いくらいの微笑みで、ヴァルカンを見ていた。

「お・し・お・きが、必要ですか？」

どうやら、化け物と言われたことが気に障ったようだ。

「すみません……、2度と言いません……」

ヴァルカンはあっさりと降参する。よほど怖かったらしく、息を切らしていたことも忘れ、呼吸を止めてしまったほどである。

足を止めた2人に、アレスが歩み寄る。

「アマランサス、こいつとはどこで知り合った？」

アレスは兜を脱ぎ、片手で抱えていた。そのため、その銀髪と、何より額から右目にかけて古い傷跡がはっきりと見えている。

一見すると痛々しいことこの上ない傷であるが、この傷自体は有名な話であり、今更取り立てた話題にする者もない。特に、アマランサスはまったく意に介した様子なく、その両手を自分の頬に添えた。

「酒場で、私のこと見てたんですよ」

そんなメイドの様子は、まるで恥じらう乙女である。

アレスは兜を抱えているため、ヴァルカンの襟首を掴むと、片手でつり上げた。

「色気付くな、ガキが！」

夢狩り人。何時如何なる時にも全力であることを示すこの通り名の通り、その眼差しは子ども相手にも鋭い。

大人げないとも言えなくもないが、そのことへの論理的考察については割愛しておくことにする。

ヴァルカンはつり上げられたままの姿勢で体を小さくしていた。

「勘違いするなよ……。確かに見てたけど、それはおかしな格好してる奴がいるって馬鹿にしてただけで……」

「ちょっとヘビィボウガンの重さ教えてあげたら青くなって逃げましたよね」

アマランサスが間髪入れずに微笑む。

「素人が」

アレスが手を離すと、地面に落ちたヴァルカンはそのまま座り込む姿勢に戻る。その途端に、威勢がよくなった。

「し、仕方ねえだろ！ あんな格好してる奴がどうして強いんだよ！？」

抗議しながら、ヴァルカンはアマランサスを、正確にはアマランサスの赤いメイド服を指さす。

アマランサスはやはり笑いながら少年の手に手袋に包まれた手を添えて、あり得ない方向へと曲げた。

「この服、手に入れるのに訓練所の課題、ほぼすべて修了する必要があるんですよ」

樹海に、人のものとは思えない声が響く。少年の叫びをよそにアレスはきわめて平静である。

「まさか知らなかったとはな」

足その下には腕を抱きかかえるような姿勢でヴァルカンがのたうち回っている。

「要するに、アマランサスに軽くあしらわれて、このハンターなら考えたわけか」

しばらくして、痛みがようやくひいてきたのか、ヴァルカンは答えた。倒れたままの姿勢で、目には涙を浮かべてアレスのことを見上げている。

「俺だって上位のハンターだけどよ、今回ばかりはやばそうなんだ……」

答えたのはアレスに代わりアマランサス。

「じゃあ急ぎましょう。ほら、村の場所はヴァルカンにしかわからないんだから」

この言葉に、ヴァルカンはついアマランサスの方を見た。現在、ヴァルカンはうつ伏せに近い状態であり、その視線は低い位置にある。

アマランサスはスカートをはいている。

結論として、ヴァルカンの目には、黒いストッキングに包まれた、それが何であるのか、結論が出るよりも早く、ヴァルカンの頭があるすぐ脇の地面を巨竜の鱗で固められたブーツが踏み抜いた。

見上げると、そこには火竜リオレウスの面構えが微笑みにも思える形相で、アレスが見下ろしていた。

「随分度胸があるようだが、勇敢と無謀の違いをどうしても知りた  
いようだな」

本日二回目の絶叫が、樹海に流された。

ンガイ村。ドンドルマの街と西方の村々を結ぶ交通の要所として発展した街である。その特徴として、樹海に端に位置することから、木造建築の家が目立つことである。

太い木々が得られることから、家はそれを大黒柱として利用した壁の少ない風通しのよい作りをしている。家の中では靴を脱ぐという独特の生活様式を持つことが特に有名である。

そんな家々が軒を連ね、道は規則正しい正方形を描いている。

南には樹々の茂る樹海。北には大海を擁する大平原を南北に縦断する形で、ンガイ村は作られていた。

通りを歩くと、村とは思えないほどの人混みと喧噪がアレスたちを包んだ。

「大きな村と聞いていたが、これでは町だな」

草食種アプトノスが引く竜車が通り、道ばたでは屋台の客引きの声が耐えない。ここが村一番の大通りであることを加味しても、その賑わいはドンドルマにひけをとらない。

アレスの横で、ヴァルカンが得意げに胸をはる。

「当たり前だろ、ンガイ村はこの辺りじゃ一番の村なんだぜ」

現在、ヴァルカンは帽子を被っていない。その帽子はというと、ヴァルカンの片手剣に紐で括りつけられていた。よほど大きな力が加わったらしく、原型を残さず潰れ、皮が引き裂けている場所もあるほどだ。

「こんなに大きな村なのに、どうしてハンターさんがいないんですか？」

ハンターという職業は一見モンスターと死闘を演じるもののように見えるが、それは素人の見解である。実際ハンターの仕事は幅広い。たとえば、フィールドにある薬草やキノコの採取、鉱物の採掘はモンスターと戦う術を知っているハンターが担うことも多い。

どんな小さな村にもハンターがいることの方が大半である。その人数と頻度は規模に比例し、ンガイ村ほどもある村にハンターがいないことは不自然である。

アマランサスの疑問は、至極まっとうなものであった。

「どうしたわけか、この付近には大型種が棲み着かないのさ。ま、一応上位に認定されてる樹海くらいはあるけど」

樹々の茂る南の森を指さしながら、ヴァルカンは答えた。

このような場所は、採取クエストと呼ばれる、特にターゲットを設定せずに狩りに必要なアイテムを集めるためのクエストに利用されることがある。

ただし、上位のハンターほど大物を求める傾向があるため、この村のように大型種が見あたらない村を拠点に選ばないことはうなずけないことではない。

「なるほど。ハンターはいても下位がいいところか」

アレスは先程から、人混みの中にハンターらしき人物を何名か見かけていたが、その装備は質素なもので、上位のハンターらしい人物は見あたらない。

大きく胸を張ったのはヴァルカンである。

「それで、俺が村で唯一の上位ハンターってわけだ」

「平和な村だったんですね」

若造のすぐそこで、アマランサスが笑う。そんなメイドの様子に、ヴァルカンは複雑な顔をしてみせた。

「どついつ意味だよ」

ヴァルカンの家に通されたアレスは、白状するなら気圧されていた。

ハンターの実家である。所詮村はずれの仮住まいのような家だと捉えていたのだ。ところが、場所は村の中央。どこを見回しても、これほど大きな家はないほどの大きさであった。

木工づくりとは言え、加工技術がしつかりとしているのだろう。壁の少ない独特の構造であり、フスマと呼ばれるスライド式の扉が部屋と部屋を区切っている。

床には何らかの草を編んで作られたと思われる長方形の板が一面に敷き詰められている。柔らかな弾力を持ち、確かにこれを靴で踏みつけにすることはできない。

ヴァルカンが先頭に立ち、アレスたちを案内した先は、やはりそんな異国情緒あふれる部屋であった。

例の草でできた板が二〇枚ほどもならば大きさがあがる長方形の部屋である。

その奥には一人の女性が正座していた。上下一枚の鮮やかな布を体に巻き、腰の部分で帯でしめることで衣服としている。何とも独特な構造である。年齢は恐らく中年と言っていていい年頃なのだろうが、化粧の乗せ方が大変うまく、その顔には気品のようなものが感じら

れる。衣服の雰囲気と相まって、艶っぽくも男好きのする女性である。

そのすぐ後ろに若い男が座っているが、こちらは別段特殊な格好はしていない。もしかすると、女性の服は礼装の類であるのかもしれない。

女性はアレスたちの姿を確認するなり、床に手をついて恭しく頭を下げた。

「初めまして、ハンターさま。私はこの村で村長を勤めていますユノーと申します。この度は愚息の申し出を受けていただき、ありがとうございます」

この家に案内する際、ヴァルカンが言っていた、村長の息子であるという話は、嘘ではなかったらしい。

床には薄い布製の袋が三つ並べられていた。女性の下にも同様のものがあるところを見ると、これは座るためのものであるらしい。

ヴァルカンがまずあぐらをかいて真ん中の袋に座る。アマランサスはその左隣に正座した。

しかし、アレスは座る気にはなれない。別に硬派を気取っているわけではないが、鎧を着たままで正座はできないし、床を傷つける恐れがある。そのことを言うまでもなく、ユノー村長は察してくれたらしい。特にやりとりはなく、話に入ることができる。

「私はアレス。あちらはアマランサス。これでいて、優秀なガンナーです」

さて、信じてもらえるだろうか。アマランサスの姿は、街中の普段着にしている女性ハンターはいるが、狩りにまで着ていくものは少なくともアレスは見たことがない。

村長はアマランサスとは違う、穏やかな微笑みを絶やさない。その視線はメイドに背負われているヘビィボウガンに向いていた。すると、近くに座っていた、恐らく小間使いと思われる若い男の方を向くと、小さな声で何かをささやいた。

男は立ち上がり、おもむろにアマランサスに近づいていく。そして、そっと手をさしのべた。

「お荷物をお預かりします」

アマランサスは笑顔で答えて、立ち上がりながらヘビィボウガンを背中から外した。肩掛けの紐を手に、若い男に手渡そうとする。

「お願いします」

なんとも自然な動作である。

受け取った男は、そのと途端大きく体勢を前のめりに崩し、危うくバウガンを床にぶつけそうになる。

なんとも不自然な動作である。

「気をつけてください。ヘビィボウガンで、子ども一人分くらいゆっぴりにありますから」

男は何とか体勢を取り戻し、ゆっくりとした足取りで隣りの部屋へと歩いていく。

この様子に怒鳴ったのはヴァルカンである。

「そう言うことは先に言えよ！」

息子の激高に対して、母であるユーノーは表情を崩さない。

「確かに、頼りがいのあるお方のようですわ」

アマランサスの腕試しに若者を利用したと考えるのは穿ちすぎかもしれないが、どちらにしる、自然な流れでアマランサスの力量を計ったことになる。

余談ではあるが、ランスは家を傷つける恐れがあるため、あらかじめ家の前で預けてある。

「ご理解いただき、恐縮です」

村とは言え、この規模の集落をとりまとめるほどの実力者であるようだ。

このしたたかな村長は、不意にこんなことを口にした。

「ところで、無理とは存じますが、一つお願いを聞いてはいただけないでしょうか？」

承ります。そんな返事をしておく。

「息子のヴァルカンを狩りに同行させていただきたいのです」

この言葉に、一番驚いたのは、当のヴァルカンである。慌てて立ち上がりそうになったところを、隣りのアマランサスがヴァルカン少年の肩を片手で掴むなり、力づくで座らせた。

「まだお話の途中でしょ〜」

剣士がガンナーに力負けしている。

「しかし、ご覧のように子息にはまだ未熟なところがあります」

だろ、こんな肯定の言葉を吐いたのは他ならぬヴァルカン自身である。

ところが、母親はというと、目の前に息子などいないかのように淡々と話を進めようとする。

「危険は重々承知の上です」

息子の抗議の声など、母には届いていない。

「ヴァルカンはいずれはこの村を代表するハンターになってもらわなくてはなりません」

ついヴァルカンに同情してしまった。

「ですが、ヴァルカンは臆病な割に気ばかり強くて、ろくすっぽ周りのことが見えていないものだから妙に自信過剰です。おまけになまじっか家が裕福なものですから、金にあかせば何でも手に入ると

考えている節があります。加えて……」

言葉が続く度、ヴァルカンの気配が弱々しいものへと変わっていく。村長の息子がハンターをしている理由の一部が垣間見えたというか、見せつけられた気がした。

「いえ、もう結構です。……見事な観察眼をお持ちのようですね」

まだまだ続きそうなので、アレスは話を強引に打ち切ってしまうことにした。

さすがにこれ以上はヴァルカンを見ていられなくなる。

「では、引き受けてもらえますでしょうか？」

駄目だと答えれば、次はどんなことを言われてしまうのだろうか。

一度ヴァルカンの小さくなった背を見てから、ユーノー村長へと視線を戻す。

「わかりました。ですが、無傷で返さないと宣言させていただきますが、よろしいでしょうか？」

飛び跳ねるようにヴァルカンが後ろを向き、アレスを見る。ただそれは、目の前にリオレウスが吼えている時に、草食種モスの鼻息を聞いたようなものである。

振り向いたところに、骨さえも焦がす火球がぶつけられる。

「いえ、もう息子には会えないとお考えください。それくらい言っ

ていただいても結構ですわ」

「おい、母ちゃん、そりゃねえだろ!!」

怒鳴るヴァルカン。その背中に、アマランサスがそっとすり寄った。

まるで恋人にでもするかのように首に手を回して、もう片方の手でしっかりと固定する。その腕はうまい具合に頸動脈に添えられている。

「はいはい、お母さんの前ですよ」

まもなく、ヴァルカンはアマランサスの腕の中で力なく眠りについた。こう言うと不必要に情状的な場面を想像してしまうが、若造が締め落とされただけの話だ。

目の前で息子が気を失ったというのに、偉大すぎる母はまるで気にも止めた様子がない。

どんな理由にしろ、この女性を敵に回すことは得策ではない。

「ともかく、了解しました……」

ユーノー村長は、もう一度頭を下げた。

「では、ことの次第を詳細に教えていただきたいのですが」

この村で起きた事件のことを、まずは聞く必要がある。

「そのことにつきましてもは商隊の者に話をさせましょう。せつかく  
ですので、あなた方も楽しまれてくださいな」

マイペースで、微笑みを決して絶やさない。この村長はアマラン  
サスとよく似ている。どうも、苦手な部類に入る女性のようである。

## 第一話「創痕の騎士と樹海の主」（後書き）

前作のメイドさんをご存知の方には、ちょっとしたお話。

ヴァルカン少年、メイドさん第二話で登場した二人組の若者の一人です。

あんな一話限りで名前さえ登場していないキャラクターに名前なんてあったのかと驚きの貴方、貴方は正しい認識をしています。

名前なんてありませんでした。ただ、樹海を舞台にしたお話を考えた結果、利用できそうなエピソードがあったため、捏造しました。伏線なんてこんなものです。

今回は特に余計なことはせずに普通に書いていこうかと思えます。ボスは私の知る限り、モンスターハンターフロンティアにのみ登場するモンスターであるとともに、2Gをご存知な方にも馴染みのあるモンスターにしようと考えています。

## 第二話「創痕の騎士と樹海への道」(前書き)

まだメイン・ターゲットは出てきません。ヒントを元に想像して  
いてください。

- ・ 樹海に登場する大型モンスター
- ・ モンスター・ハンター・フロンティア・オンライン限定
- ・ 頭部の部位破壊を行います

ただ、私もすべてのモンハン・シリーズをしているわけではない  
ため、2番目のものが本当にそうであるのか、少々疑問に感じて  
います。

フロンティアにしかないと思うのですが……。

## 第二話「創痕の騎士と樹海への道」

村長の家では靴を脱いで家にあがるという独特の文化に戸惑った。そのため、アレスはこの村にいる間は鎧を脱ぐことにしていた。

家にあがる度、突っ立ったままとはいかないからだ。今は布地一枚のラフな衣服を身につけていた。しかし、訪れたのは酒場である。ギルドがハンターたちのたまり場として運営し、クエストもまたここで受付が行われている。どのような場所にあっても、その様子は変わっていない。

木から切り出した分厚い椅子とテーブル。その上には盛りつけられた料理と酒。ハンターたちの体臭と混じりあつた空気が独特の熱気を生み出している。

加えて、今日は何らかの祝い事でもあるらしく、賑わいはひとしおである。

ただ、付近に大型モンスターがいないためか、ハンターたちは若者が多い。他の酒場と違うところなど、これくらいなものだろう。

給仕のメイドが席と席の間をトレイ片手にせわしなく動いているところも同じである。

そう、メイド、アマランサスは笑顔を振りまきながらテーブルへと料理を運んでいた。

「何やってんだよ、あのメイドは……？」

呆れたように、本職ハンターの少女を眺めているのはヴァルカン。ただし、誰もこの少年に応えた者はいない。ヴァルカンがついているテーブルでは、今まさに狩りについての重要な話し合いが行われているからである。

テーブルにはヴァルカンの他、アレス、そしてモンスターに襲われた商隊から、メリクリウスという中年の男性、そしてヘルメスと名乗る若者が席についていた。テーブルの脇には緑色の制服を着た受付嬢の姿もある。

落ち着きのない少年以外の全員が、話に集中していた。

「わしらはいつも通り樹海を通るルートで商品を運んでいた。ここらの樹海には何故か大型のモンスターが住み着かず、比較的安全なルートだったんだ」

メリクリウスの言葉を、ヘルメスが怯えた様子で引き継ぐ。

「ところが、あの日は違った。突然大きな鳴き声が出たかと思うと、アプトノスたちが暴れ始めたんだ」

姿は見えていないが、あれは恐ろしい化け物に違いない。ヘルメスはそう、話を締めくくった。

皿に盛られた料理をヴァルカンは口に放り込む。

「ヒプノックとかじゃねえの？」

眠鳥ヒプノック。鳥竜種に含まれる大型モンスターで、その名の通り麻酔作用を有する唾液を分泌する。しかし、あくまでも鳥竜種

であり、決して危険なモンスターではない。

メリクリウスは首を大げさに思えるほどに横に振る。

「いや、わしもヒプノックを見たことがあるが、あの声はそんなものとは比べものにならなかった」

「ギルドの方でもヒプノックどころか、他の大型種が付近に現れたという情報は掴んでいません」

受付嬢の言葉である。

モンスターとて、降って沸くわけではなく、土地から土地へと移動する。大型種ともあればあらかじめどこぞなりで目撃され、ギルドに報告されているはずである。

もっとも、姿を消すことができるようなモンスターがいれば、話は別だろうが。だが、そんなモンスターは無論、見たこともない。

これらの情報を加味して、アレスは一つの結論を出した。

「そうなると考えられるのは樹海の深部に棲んでいたモンスターが人里近くにまで降りて来た線が濃厚だな」

珍しいことではあるが、この可能性がないとは言えない。ただどちらにしろ、モンスターの正体を特定する材料は見あたらぬ。まずは調査を積み重ねることが先決であるようだ。

そう思案するアレスの袖を、隣りに座っていたヴァルカンが引張る。

「ところでおっさん」

アレスだ。そう、まだ中年と呼ばれる歳ではないと主張しながら、ヴァルカンの手を外す。ヴァルカンは意に介した様子はない。

「アマランサス姉ちゃんも狩りに行くんだろ？ 話聞いといてもらわなくてもいいのか？」

酒場の中でなら、アマランサスは極めて自然な様子でなじんでいる。ヴァルカンが振り向くことなく指さすと、アレスは首だけ回してアマランサスを見る。

そしてすぐに顔を前に戻した。その顔には軽く笑みさえ浮かんでいる。

「見くびるな。アマランサスはあれでいて地獄耳だ。ああして給仕に集中しているように見えて、しっかり聞いているはずだ。試しに小声でアマランサスのブスと言ってみ……」

アレスの後頭部に酒瓶が直撃した。碎ける瓶の音と、テーブルに突っ伏すアレス。瞬時にして凍り付いた空気の中で、アマランサスだけが微笑みを絶やすことはない。

「アレス、聞こえていますよ」

村の武器工房に足を踏み入れた途端、アレスは欠伸をかみ殺した。このまま狩りに出るためにすでに身につけている鎧が音を鳴らす。

「アレス、眠そうですね」

横にはアマランサスが普段通りの服装と笑顔で歩いている。

「お前が寝かせてくれなかったからな」

肩に手を乗せようとすると、アマランサスはうまく身を引いてこれをおかわず。どうやら、まだ昨日のことを許してくれていないらしい。ヴァルカンが余計な一言を発しながら、アレスたちの脇を通り抜ける形で工房の奥へと早足に入っていく。

「後頭部の傷が痛くて眠れなかっただけだろ」

捕まえてやるうにも、すでに若造の姿はカウンターの前にある。

工房は、やはりギルドの管轄にあるためかこの街、村でもそんなに様子は変わらない。炎が燃え盛り、それ自体が照明の代わりにして赤黒い景観を演出している。

カウンターの奥では白い顎髭を長く垂らした老人が大きな鎚を杖代わりに使っていた。柔和な笑顔の老人だが、張りつめた二の腕の筋肉は侮れない気配を発している。

「よう、ウウルカヌスのじっちゃん」

ウウルカヌスと呼ばれた老人は、どうやらヴァルカンと周知の中であるらしい。

「何だ、ヴァルカンか、やっぱりハンターが辛くなって戻ってきた

ようだな」

「馬鹿言つなよ。これから例の大物狩りに出かけるところさ」

からかい方も、その返し方も、どちらも堂に入っている。

「いや、お前には鍛冶の才能がある。ハンターなんぞやめて、農の後を継げ」

ウウルカヌス老人がこう勧誘することもいつものことなのだろう。ヴァルカンはろくに相手にした様子も見せず、ハンター装備の頭を守る帽子をカウンターの前に置いた。

「やなこつた。それよりも、これ、直せるか？」

アレスがとある事情から踏み抜いたもので、すでに原型を留めていない。

帽子を手に取ったウウルカヌス老人のようなプロにしても、結論は同じであるらしい。

「随分やられたな。こりゃ、作りなおした方がいいくらいだ。よほどの強敵と戦つたようだな」

ヴァルカンは妙に気取った格好をしている。カウンターに片膝をつき、一端のハンターを気取っているのだ。ただし、その声は上擦っついて、よくも悪くも嘘がつけない男である。

「まあな……。何と蒼いリオレウスだぜ……」

ウウルカヌス老人は、まずアレスの姿を見た。そして、その隣りのアマランサスを見ると、したり顔でヴァルカンへと視線を戻す。

「さてはあそこの可愛い雌火竜に手を出したな」

「勘が鋭いにもほどがあるぞ、じつちゃん!!」

カウンターの前でヴァルカンが飛び跳ねる。

リオレウス亜種というヴァルカンの相手。アレスが身につけているのはリオレウス亜種の装備である。そして、アマランサスの存在

たったこれだけの情報から真実を見抜いたらしい。村長にしろ、親方にしろ、この村の住民は侮れない。特に力を試すだとかか考えていた訳ではないが、頼りにできるのではないかと思わせてくれる。

アレスはヴァルカンを押し退ける形でカウンターの前に立つ。

「早速だが親方、この付近で手頃なモンスターは何がいる？」

考えた様子もなく、ウウルカヌスの返事は早い。

「強いて挙げるとすればランポスくらいだな」

大型種はいない。それに、樹海に棲むランポスは特定の群に所属しない個体が集まるようで、ボスであるドラランポスは観察されたことはない。返事は予想通りであった。

「ではランポスSを一式揃えたい。これがこいつの所持している素材の一覧だ」

ランポスの皮や鱗を鉱物で繋ぎあわせた防具のことである。特に、上位に認定されている場所からは上質な素材が得られるため、同じデザインでもより強力な装備を作ることができる。Sとは、上位の装備を示す記号である。

アレスは一枚のメモを手渡す。無論、書かれているのはヴァルカンのアイテム・ボックスに入っていた素材のリストである。

「何勝手に人のマイボックス漁ってんだよ！」

こんなヴァルカンの指摘は、当然のように無視される。

「基本的なものは揃っているみたいだが、ランポスの上鱗が足りないな。鉱物もドラグライト鉱石がないと、強度に不安が残る」

どちらも樹海でなら揃うことだろう。

「ではすまないが今作ることのできる範囲でこしらえてくれ。足りない分はこれから集めさせる」

ウウルカヌスがうなづく。これで若造の防具を一新することができる。

ただし、当のヴァルカンは不満げである。

「勝手に決めんなよ。それに素材がなければ、分けてくれよ」

特に何でもない、わがままな餓鬼の言葉のように思われるかもしれないが、アレス、アマランサス、ウウルカヌスの冷めた眼差しを

集めるには十分であった。

「お前本当に上位ハンターか？」

まずはアレスが冷たく言い放つ。アマランサスにしても、その顔は少々真剣である。

「ヴァルカン、素材、特にモンスター素材は売買や受け渡しはハンター間はもちろんのこと、ギルドの許可を受けた場所でないとお店に卸すこともできませんよ」

モンスター素材のすべてではないが、中型、大型種ともなると上位、下位に関係なく渡すことさえできない。

「何でだよ？」

「ハンターにとって、一回一回の狩りが昇級試験もかねているからじゃよ。素材が安易に手に入ってしまうえば、防具の性能と自分の実力を勘違いした馬鹿が強力なモンスターに挑みかねん」

ヴァルカンの言葉を読んでいたように、ウウルカヌスの言葉は迅速かつ的確である。ハンターの武具は、自らの手で勝ち得たものだけで作ることが認められている。

ハンターとは武具を得ることで強くなるのではなく、強くなったことで武具を得る権利が与えられるのである。

「だ・か・ら、ハンターは身につけているものを見ればだいたいの実力がわかるとまで言われてるんですよ」

アマランサスがスカートを摘みあげて一回転する。お気に入りの洋服を見せびらかすような動作である。もちろん、メイド服には目に見える形でモンスター素材は使われていない。

ヴァルカンにとって、アマランサスはハンターの具体例として不適合と言わざるを得ない。

「説得力ねえよ……」

「うわ、うじゃうじゃいるじゃん」

樹海に踏み入ったヴァルカンの言葉である。

ベース・キャンプを設営してある場所からすぐ北の区域では、比較的大型の大樹が葉を広げ、太い幹が障害物として区域をいびつな形に分けていた。敷地面積は決して狭くはないが、前述の通り樹が邪魔をして、狭い広場がいくつかつながつているような印象を与える。

アレスたちがいるのがベース・キャンプから見て一番手前の広場であり、奥の広場にはランポスが群れている。

ランポス。小型の鳥竜種に特徴的な細い体に短い手、細く長い顔には小さな牙が敷き詰められている。必ず複数で狩りを行う掃除屋とも呼ばれる低次捕食者である。その青い体表がいくつも重なって見えた。

目視で、ざっと五と五といったところだろう。群の統制役であるドス

ランポスの存在もなしにこれだけの数が維持できる例は稀である。

「ちよつと潜つただけでこの数か。ここは本当に豊かな森であるよ  
うだな」

アレスの言葉を、アマランサスが受ける。

「これでどうして大型種が棲み着かないんでしょうね？」

あれだけのランポスが棲み着けるということは、それだけ餌が豊富にあるということだ。アマランサスの言つとおり、これで大型種  
がないことが不思議でならない。

ただ、これだけの数がいれば、素材をそろえることは容易だろう。

アレスは特に身構えることもなく、ランポスたちの元へと歩き出  
す。すぐ後ろからアマランサスがついていく。

ただし、ヴァルカンは声を追わせるだけである。

「おい、危ねえだろ……」

アレス、アマランサスはそろって後ろへと振り向いた。

ヴァルカンはと言うと、樹の後ろに隠れ、声も潜めたものである。

上位ハンターなら、下位の比較のおとなしい個体とは言え飛竜の  
狩りも経験しているはずだが、この若造はこれまでどのようなクエ  
ストをこなしてきたのだろうか。

何にしろ、教えるべきことは多いようだ。

「モンスターはたとえ肉食性のものや飛竜でもよほど空腹でないか、縄張りを冒さない限り決して人を襲わない」

ドスランポスがいない以上、あのランポスたちはここを縄張りに行っているわけではなく、徘徊しているだけと思われる。

そう説明すると、ヴァルカンは樹の影から出た。ランポスたちがこちらに気づいた様子もないことで、徐々に気が大きくなっていく様子が手に取るようにわかる。

明らかに腰が引けていたはずが、背筋が次第に伸び、アレスタたちの側に来る頃には、胸を張ってふんぞり返っている有様である。

「何だ、なら怖くねえな」

特に止めないでいると、ヴァルカンは一人でランポスの群へと歩いていく。

そろそろランポスたちに気づかれる。そんな距離にまで近寄ったところで、アレスタは大切なことを言い忘れた気がした。

「ただし、モンスターは賢い。ハンターが狩りをするために訪れることを知っている。そのため、武器や防具に使用される鉱物や、こびりついた血の臭いを嗅ぐと我先にと襲いかかってくる」

そのため、餌にもしないくせに、攻撃的なモンスターはハンターの姿を見つけるなり襲いかかってくる。特に大型種の狩猟の最中におそわれれば面倒この上ない。そんなことをアマランサスと話して

いると、ヴァルカンの悲鳴が耳に届いた。

別に特別なことはない。ヴァルカンが、警戒のための声を上げながら襲いかかるランポスの一群に追い回されているだけである。

「結局襲われるってことじゃねえか〜!？」

ヴァルカンの叫び声を頼りに攻撃でもしているように、ランポスは次々と跳びかかる。手に比べると太く強靱な足で、ランポスは見上げるほど高く跳ぶ。その多くは外れ、足で土を掴んだだけである。ただし、中にはもの見事にヴァルカンの背中をとらえたランポスもいる。

蹴り飛ばされ、ヴァルカンは何とも間の抜けた声を出して、茂みの中へと転がっていった。

ランポスは鳥竜種に属するため、骨密度は概して低い。見た目ほどの重量はない。そのため高く跳び上がれるのだが蹴られたところで致命傷になることはまずない。

ヴァルカンもすぐに起きてくるだろう。

ランポスたちはヴァルカンをしとめたと見て、アレスたちに関心を移したようだ。

アレスは背中からランスと盾を取り出す。槍は左手に、右手に盾を構えた。

ブループロミネンス。蒼火竜のしなやかで強固な尻尾の構造を盾として再現したため、まるで尻尾を盾として構えているようにも見

える。左手に構えられるランスも尻尾を思わせる造形が見られる。蒼い刃が鋭く伸びている。

ランスは長大である。そのため、構えた途端に重心のバランスが崩れ、足取りは重くなる。

動きの鈍くなったアレスを容易な獲物と見たのか、先頭のランポスが文字通り牙をむき出しにしてアレスへと食らいつく。

アレスは冷静に、盾を体の正面に構え、腰を低くする。

ランスがその重い足取りと引き替えに得たもの。それは頑強な防御力である。盾にランポスと鋭い牙が突き立てられるが、アレスは身じろぎ一つせずにその攻撃を受け止めた。

リオソウルと呼ばれる蒼火竜から得られる鎧は、構造に工夫が凝らされており、ガードの構えをとるとそれぞれの部位がうまく噛み合わさり、衝撃を吸収、緩和することでより強固なガードが可能となる。

ランポスの攻撃を軽く受け止めたアレスは、おもむろにランスを突き出した。

ランスの切っ先がランポスの腹に突き刺さる。その途端、火花が咲いた。

ブループロミネンスには大気に触れると自然発火する火竜の骨髄が内蔵されている。ランスの切っ先が何かに突き刺さると、刃の一部がスライドし、通常は完全密閉された骨髄へと空気が送り込まれる。それが火として吹き出し、抵抗がなくなるとまた刃が骨髄を密

閉し、火を消すため、攻撃した一瞬だけ火が爆ぜる。

火と刃にさらされたランポスが跳ねるように地面を転がると、二度と起きあがることはない。仲間の死を悲しむにしては、生物とは合理的にできている。いちいち悲しみを露わにして、隙を見せることはないのである。

すぐさま残りのランポスたちは攻撃しようとする。

しかし、そんな迅速な対応さえ、すでに遅い。

アマランサスがヘビィボウガンを構えていた。カホウ「狼」の禍々しいほどの紫が鈍い光沢を放つ。アマランサスは笑顔のまま、引き金を引いた。

銃身にこしらえられた取り込み口が次々と開く。それは小さなもので、外見からわかるものではないが、空気を取り入れるには十分な広さがある。内蔵された火竜の骨髄に大気を送り込まれることで、銃身内で炸裂、高められた圧力によって弾が飛ばされる。

銃口から何かが弾けたように散った。すると、ランポスたちが次々悲鳴をあげる。

アマランサスが二度、三度、四度と引き金を引くと、その銃口の前にはランポスの亡骸が並んでいた。

散弾LV2。竜の牙と呼ばれる固い石をカラの実に詰めたもので、威力には乏しいが、広範囲をまとめて攻撃できるため小型種の駆逐に向いている。

アマランサスにいいところを持っていかれてしまったらしい。

アレスがランスをしまっていると、ヴァルカンがようやく茂みの中から這い出てきた。やはり、傷らしい傷は負っていないようだ。

「すげえ……」

たかがランポスを倒しただけで、ここまで賞賛されたのは初めてのことだ。特段の喜びはわいてこない。

アレスは腰から剥ぎ取り用のナイフを取り出すと、それをヴァルカンへと放り投げた。短い悲鳴をあげながら、ヴァルカンはかろうじてナイフを受け取ることができた。

「何をしている？ 早くはぎ取れ。時間が経つとうまくはぎ取れなくなるぞ」

何やら不満そうな顔をしながら、ヴァルカンは剥ぎ取りのためにランポスの死骸に近寄る。

こんな時にも、まるでタイミングを合わせたように言い忘れたことを思い出す。

「言い忘れたが、剥ぎ取り中はどんなハンターも無防備になる。付近への警戒を怠るな」

腰を低くしてランポスにナイフを入れていたヴァルカンの上に影が落ちた。アマランサスが撃ち漏らしたランポスが一頭残されていたらしい。

口を大きく開けて、今にもヴァルカンに噛みつきそうとしていた。

「そっついうことはもっと早く言え〜!!」

ようやくランポスの気配に気づいたヴァルカンが叫び声をあげた。

## 第二話「創痕の騎士と樹海への道」(後書き)

少々セリフに比べて地の文が多くなってしまいました。よって、予定変更を余儀なくされています。

次こそ「ひよっこの奮闘」でいければいいかなと。

しかし、このヴァルカン少年、本当に下位ではどんなクエストをこなしてきたのでしょうか。私にもわかりません。

ボス・モンスターの登場は恐らく、四話後半から五話にかけてのあたりになると思います。

**第三話「創痕の騎士とひよっこの奮闘」(前書き)**

まだメイン・ターゲットは影も形もありません。

登場は五話になりそうです。

### 第三話「創痕の騎士とひよっこの奮闘」

「鉱石を効率よく掘ることが出来る場所はだいたい決まっている。ハンターであるなら、その場所を見極めることが肝要だ」

場所は変わって、巨木の虚の中である。ベース・キャンプの北に見えた巨大な樹であるが、すでに幹の中腹から上が失われている。死滅して久しいのか、樹の内部は風化し空洞化が進んでいる。それ自体が一つの区画になるほどに広い洞窟のようになっていた。

幸いモンスターの姿はなく、アレスは北側の壁にまでヴァルカンを連れてきていた。

むき出しになった岩がある。

「こんなふうに、岩が裂けて内部が露出している場所がお勧めです」  
岩の横に立って、まるで何かを披露でもするような手つきでアマランサスが岩に刻まれた裂け目を示す。なかなか深くまで亀裂が入っており、わざわざ固い岩を崩さずとも鉱物を手に入れることができるのはこのような場所である。

ハンターが普段採掘に使用するピッケルは携帯性を優先し、軽量の金属が使用されている。その対価として非常に脆い。

そのためできる限りピッケルを痛めないように採掘を行わねばならないため、アマランサスが紹介したような場所に限定する必要がある。

ヴァルカンはピッケルをかつぎ上げた。

「俺だって上位ハンターだぜ。見せてやるよ、俺の力をなあ！」

そうピッケルを振りあげるヴァルカンの背にはランポスの足跡がくつきりと刻まれている。

ピッケルと岩とが激突する甲高い音がした。崩れた岩の破片が裂け目を通ってこぼれ落ちる。その中に、わずかに光沢を有するものが含まれていた。

ヴァルカンもそのことに気づいたのだろう。屈み、それを片手で拾い上げた。

聞こえてきたのは舌打ちの音。

「ちっ、なんだよ、くず石か。こんなのいらねえ……」

拾った鉱物を肩越しに投げ捨てようとする。その手を、アレスは力強く掴んだ。

「それはアミノタイトと言ってな。一見くず石のようだが、非常に希少な鉱物だ」

どうしてこいつはそんなことも知らないのだ。そんなアレスの疑問にも近い怒りが、自然と手に力を込めさせる。

小さい、しかし長い悲鳴をヴァルカンは死せる大樹の遺体に響かせた。

続いて、樹海東側。

縦に広い区画であり、樹の密度は比較的薄い。だが、広場のほぼ真ん中に巨木があること、またその樹が枝を広く広げていることから、それほど解放感はない。

それでも、他の区画に比べれば陽光が差している。そのため、背の低い草花が見られた。

東の崖の側に生えた樹、その根本に生えたキノコをヴァルカンが採取している。膝をつけて、手探りで採取は行われる。

アレスはそんなヴァルカンの様子をかまわず、説明を続ける。

「採取は、加工されたアイテムに比べれば効果の薄いものしか集めることはできないが、持ち込めるアイテムには限りがある。どのような場所に薬草や青キノコが生えているのか知っておくことは決して損にはならない」

場合によっては薬草と青キノコを採取し、調合すれば回復薬を得ることもできる。さらに蜂の巣を見つけることができればハチミツを加えることで回復薬グレートを現地から得られた素材のみで作ることもできるのである。

そんなことを言い聞かせても、ヴァルカンは聞き流している。

「採取なんてもう一〇〇回はしてるぜ」

たしかにその手つきは慣れたもので、二トロダケをすでに三つほど袋に詰めている。

そう、採取に夢中になるヴァルカンの死角を選ぶように、耳障りな羽音が近づいていることに、この若造は気づいていない。

ランゴスタ。甲虫種に属する羽虫で、人の腕ほどもある細長い胴体に小刻みに震える幅広の羽がついている。黄色い体色の蛇腹の先に細い毒針が見えている。

アレスとアマランスが見守る中、ランゴスタはゆっくりとヴァルカンに近寄ると、その針をハンター装備の上から突き刺した。毒針自体は細く、長さもないため大きな傷にはならない。しかし、この針の恐ろしさは、やはり注入される毒にある。

大きく手を振って、ヴァルカンの体が伸びた。麻痺毒によって生じた痙攣である。そのままヴァルカンの体は地面にへばりつくように倒れた。時々、体がわずかに跳ねるのは、やはり毒の影響である。

「敢えて言いませんでしたけど、止まっている時や採取している間ほど、ランゴスタは寄ってきますよ〜」

手を胸の前で合わせるアマランスの仕草は、一見すると謝っているように見えなくもない。もっとも、その顔には満面に笑みが浮かんでいるのだが。

「なべ、べ、いう、あな……がっ」

毒が顎や舌にまで回っている。通訳するなら、何で言わなかった、といったところだろう。弱毒であり、聴覚まで浸食されてはいない

はずであるので、かまわず話すことにする。

「ランゴスタの麻痺毒は速攻性で注入されれば逃れる術はない。毒が分解されるまで一〇秒とかからないが、その間身動き一つとれなくなるため、用心が必要だ」

「こんなこと、常識、ですよね」

まだ起きあがることのできないヴァルカン。ランゴスタは満足したように飛び去っていった。

先ほどの広場から巨樹を挟んだ西側。北側から迂回して入ると、珍しく樹々の生えていない、背の低い草が敷き詰められた狭い区画が目に入る。

アレスは地図を取り出し、ここが三番区画であると確認した。アマランサスも地図を覗き込んでいるが、ヴァルカンはランゴスタに刺されて以来妙に警戒心が強くなっている。落ち着きなく上をうかがって首を回している。

「地図を頭の中に入れることは非常に重要だ。特に、新しいフィールドでは地図が支給されないこともあれば、また地図だけではわからないこともたくさんある」

「たとえば、どこにどんなモンスターがいるのかとか、どんな特徴があるのかとか」

せっかく講義しているというのに、ヴァルカンはどんどん歩いて

いく。満足に足下を見ていないので、危ないことこの上ない。

アマランサスが突然大きな声を出した。

「あ、ランゴスタ！」

特に飛んでいる姿は見えない。ところが、すっかり怯えているヴァルカンは両手を振り回して、まるでだだをこねる子どものようなようである。

ハンターならまず武器を手にするものだが、本当にこの若造はハンターとしての素質が見られない。

「こ、こつち来んな！」

すると、突然ヴァルカンの姿が消えた。

「高低差が地図上で再現されているかと言われれば、残念ながら否定するほかない」

「そうですね。だから新米ハンターさんはよく崖に気づかなかつたりとかして危ないんですね」

アレスは地図をしまいながら、アマランサスはその横で頷いている。

姿を消したヴァルカン。しかし、地の底から響いてくるような声だけは聞こえている。

「た、助けるよ……」

この狭い区画は北と南で分かれている。北側が隆起した高台になっており、南側とは切り立った崖で区切られている。

ヴァルカンは、北側の高台に指だけを残して、必死にしがみついていた。

崖を降り南の区画へと移る。すると、そこは以前の区画と同じような草が生えた高台の上であった。

ヴァルカンは、今度は下を向いたまま首を上げようとしなない。

そんなに心配しなくとも、ここは低いところと比べると人の背丈ほどの高さしかない。また、一段低い高台があるため、多少大きな階段のように地面に降りることもできる。

そのことがわかると、ヴァルカンはわかりやすく胸をはって歩きだした。

まずは腰ほどの高さを飛び降り、一段下へと降りることにする。先頭をヴァルカン、その後ろからアレス、アマランサスが続く。

「ようやく帰れるな」

ヴァルカンは意気揚々として様子だ。

この区画さえ抜ければ、南側の細い道を通ってベース・キャンプにつくことができる。

ここには特に危険なモンスターは見られない。三頭ほどの草食種モスがキノコを探して地面を嗅ぎ回っているだけである。

ずんぐりとした体に短い手足。先端が平たくつぶれた鼻が特徴的なモスは人の足の長さほどの背丈しかない。モンスターにしては小柄であり、また極めておとなしい性格であるため、決まりを守ってさえいれば恐ろしいものではない。

アレスとアマランススが低い場所の様子を確認していると、ヴァルカンはかまわず高台から降りてしまった。

ヴァルカンの目の前には両脇を切りそろえられたような岩で囲まれている道があった。ベース・キャンプへと通じている道である。

ただし、モスがゆっくりとした足取りで道とヴァルカンの間に割って入った。

後少し。そうした意識が、ほんの少し針路をずらすことさえ煩わしいとヴァルカんに思わせたのだろう。

「邪魔すんなよ」

ヴァルカンはモスに軽く蹴りを入れた。

その光景に、アレス、アマランススは高台から跳び降りることをやめた。ヴァルカンの名前を呼び、この若造が立ち止まり振り向いたところでまた講釈を始める。

「モスはとてもおとなしい。しかし、蹴られて黙っているほど善人

でもない」

「いじめちゃ駄目ってことです」

アマランサスが指を立てて、それを横に振る。当のヴァルカンはよくわかっていない顔をしていた。その顔のまま、ヴァルカンの体が横へと飛ぶ。

モスが体当たりをしたのだ。完全に足をすくわれる形で、ヴァルカンは両膝をつき、手を支えとして倒れることだけは辛うじて避けた。

「注意しろ。草食種の中でも小柄なモスだ。大した力はないが、肉の塊であることに変わりはない。大の大人でも転倒することになる」

果たしてヴァルカンは聞いているだろうか。怒鳴りながら立ち上がるが、そこへちようどモスの突進が重なった。今度は尻餅をついて後ろに倒れる。

モスは勢いあまって、別のモスにまで体当たりをしてしまった。

すると、体当たりを食らったモスの顔つきが変わる。

「それと、みなさん結構理不尽で、叩いたのが誰であっても人間を襲いますから、がんばってくださいね」

アマランサスが安全な高台で手を振っている間、ヴァル感は何度となくモスの突進を受けていた。いつの間にか三頭目のモスを加わっており、巻き起こる土煙に、ヴァルカンの姿は見えなくなっていた。

ベース・キャンプに戻ってきたところで、日が落ちた。ハンターは夜間に狩りを行うことも当然あるが、極力避けるべきである。

昼には当たり前に見えているものさえ見逃してしまう恐れがあれば、道に迷う恐れもないわけではない。

アレスはベース・キャンプで夜を越すことを決め、ヴァルカン、アマランサスとともに薪を囲んでいた。夜の森は静かなもので、燃え盛る炎の弾ける音がよく聞こえる。

この火を利用しているのはヴァルカンである。火を挟むように木でこしらえた柱を2つ用意して、杭に突き刺した肉を回しながら全体に均等に焦げ目をつけていく。

リズムをとるための鼻歌を口ずさみながら、ヴァルカンはほどよい手つきで肉を回す。

肉はすっかり火を通さなければ生焼けに、通しすぎるとコゲ肉になってしまう。火からあげるタイミングが命である。

ヴァルカンは肉の色が変わって見えた、そのタイミングで肉を火から勢いよく持ち上げる。その勢いのまま、肉を高く掲げた。

若造の顔は自信に満ち、その肉は食欲をそそる見事な焼き加減をしている。

「へ、俺が本気になればこんなもんだ」

確かに、肉の焼き方だけに關しては、ヴァルカンを認めてもよい。アマランサスは拍手までしている。

「前々から疑問に思ってたんだが、お前はこれまでどんな狩りをしてきたんだ？」

アレスが声をかけている間、ヴァルカンは上機嫌な様子で肉を皿に切り分けている。

「肉やいて、ちょっと小突きゃ、どんなモンスターもイチコロだったぜ」

何となくは予想していたことではあった。どうやら、ヴァルカンはよほど優秀なハンターとクエストに出かけることが多かったらしい。本人の言うとおり食事の準備でもしている間に、狩猟をほとんど終えてしまったのだろう。

ハンターは貢献度によって評価が分かれることはない。クエストに参加した場合、誰もが均一の評価を与えられる。

そのシステムに問題があると考えたことはなかったが、ヴァルカンのような下位ハンター同然の上位ハンターを生み出してしまう弊害もあるようだ。

今更ため息をつこうとも思わない。

「お前は一度、本当の狩りというものを経験した方がいいようだな」  
細かく切られた肉が盛りつけられた皿が地面に置かれる。ヴァル

カンの顔は、何故か少々ご機嫌を損ねている様子である。

「じゃあ、おっさんはどんな狩りをしたんだよ？」

まったくプライドだけは一人前であるようだ。

肉を摘みながら、アレスは話を聞かせてやることにした。無論、おっさんとは呼ぶなと言い聞かせておく。

「今から一〇年以上前か。俺がまだ一三だった頃の話だ」

年齢が20代後半であるとわかると、ヴァルカンはやっぱりおっさんだと、あくまでもアレスの呼び方を変えようとしなない。

話の途中だと、構わず続けることにした。

それはアレスの故郷の話である。近くに豊かな森と丘、密林があるため大型モンスターが多く、ハンターが多数居住する村であった。

アレスの両親もまたハンターであり、まだ正式なハンターとして狩猟に出ることが許されなかったアレスも両親についていく形で狩り場を幾たびも訪れた。

手伝いと称して武器を持ちだし、親と一緒にモンスターを討伐することもあった。

それは楽しいものだった。親が弱らせたモンスターを追いかけはとどめをさす。大きなモンスターが命を失い自分の足下に転がっている様子を眺めることがそれは楽しかった。

事実、アレスは筋がよく、狩りの腕前の上達は早いものだった。

「俺は図に乗っていた。狩りなんて楽勝だと、モンスターなんて自分の自尊心を満たすため、皆から認められるためだけのものだと考えていた」

ある日、アレスは親の目を盗み、馬車に潜り込んだ。ギルドが討伐すべきか決めかねているドスランポスを一人で狩猟してやるつもりだったのだ。

たかだかドスランポス。ランポスの親玉とは言え、所詮鳥竜種。どうとでも狩ることができると考えていた。

実際は違った。一人で狩りに出ると、モンスターは当然狙いを集中してくる。両親と一緒にいた時は両親が前を守り、またモンスターに狙われる確率も三分の一以下にまで低下していたことに気づかされた。

攻撃の機会は激減し、命の危険に晒される回数が激増する。

怖くて、恐ろしくて、さらに孤独であった。

逃げようと背中を見せることもできない。恐怖にまけて武器を降ろすこともできない。

戦う他なかった。倒す他なかった。

「この傷はその時に受けたものだ」

兜は今はずけていない。そのため、指で示すだけで、右の額から

目にかけて刻まれた傷を見せることができる。

ヴァルカンは嫌な息を飲み込んだような顔をしている。

「それで、ドスランポスはどうなったんだよ……？」

倒したとき。そう話すと、ヴァルカンは安堵したように息を吐いた。

せつかくなので、後日談を聞かせてやることにする。

一人でドスランポスをしとめた。両親は危険を冒したと激怒した。ギルドは許可していない狩猟を行ったとしてアレスから武器を取り上げた。

アレスが倒したドスランポスはその縄張り一帯を守っていた。他のモンスターの進入を阻止する役割を担っていたのである。ところが、アレスが倒してしまったことで、より大型の鳥竜種であるイヤンクックが人里近くにまで出没するような道を作ってしまったのである。

結果、人的被害こそ出なかったらしいが、村は安全な行路を求めて大きく迂回せざるをえないなど、明らかな被害を被ったと聞かされた。

その時、アレスは初めて気づいた。ハンターが賞賛されるのはモンスターを狩るからではない。モンスターを狩ることで人々の生活と安全を保障するからなのだ。

それから、アレスは正式なハンターになるまで狩りについていくことはなくなった。

強いだけでは、モンスターを狩ることができるだけではハンターにはなれないと知ったからだ。

「いいか、坊主、強いハンターになりたければ、ハンターをやめろ」

そろそろ肉が減ってきていた。ヴァルカンは新たに肉を焼き初めていたのだが、アレスが唐突にかけた一言に随分と取り乱したようだ。

「なんだよ、そりゃ!？」

手元が狂い、飛んだ肉の油がヴァルカンの手にかかった。轟く悲鳴。それでも肉を回し続けるところに、この若造の肉焼きに対する熱意と執念を感じる。

説明を補足したのはアマランサス。

「誰も強いハンターなんて望んでませんよ。ハンターはその所属する共同体のためにどれだけ貢献できるかが評価になります」

どれほど強いハンターがいたとしても、誰も知らない場所で、人と関わることなく生きている飛竜を討伐したところで、何の意味もない。

不必要に生態系を傷つけ、人の社会にまるで貢献することがないからだ。

それならどれほど弱くても、増えすぎたランポスを間引いてくれる下位ハンターの方がどれほどありがたいことか。

肉の焼ける匂いの向こう側に、ヴァルカンの真剣な顔がある。どうやら、手の痛みは抜けたようだ。

「でもさ、たとえば、とんでもなく強いモンスターが村に現れたらどうすんだよ？」

強いハンターがいなければ村が壊滅的な被害を被ってしまう。そう言いたいのだろう。

「そう言った強力なモンスターはギルドがマークしている。それに、モンスターには縄張りというものがある。そんなに急速には居場所を変えたりするものではない」

そもそも、そんな大型のモンスターが迷い込むような場所にどうして村が発展するのだろうか。結論以前に、論理の順序が逆である。

だが、まだヴァルカンは納得した様子はない。

モンスターに襲われた村に颯爽と現れ、その危機を救う。そんな英雄のような活躍をしたいのだろう。あまり認めたいことではないが、アレスにとって若い頃の自分を見ている気にさせられる。

「でもよお、世界は広いんだし、ギルドがチェックしきれない奴もいるだろ。それに、何かの拍子で飛竜とかがいきなり村を襲ったりしたらどうすんだよ？」

アレスも以前は、こんなことを考えてもいた。つい答えを躊躇っている、アマランサスが口を挟む。

「世界は広いのに、圧倒的に広い自然よりも、点在する村を重点的に襲うんですか？」

そもそも、飛竜が村を襲うメリットは何もない。ハンターの嫌な臭いのする場所であり、同時に獲物がいないのだ。

人を狙って捕食するモンスターはまずいない。人は骨と皮ばかりであり、またモンスターの縄張りに姿を見せることも少ない。そんなものを狙うよりは草食種アプトノスの子どもでも探した方が一度の狩りでたくさん肉を得ることができるからである。

もちろん、モンスターの襲撃を受けた村がないわけではないが、そのような不測の事態をできる限り防ぐためにギルドは組織され、モンスターの生態、動向を各地のハンターからの報告を元に監視している。

村の付近に大型モンスターが出現すれば、警告が行き、避難勧告あるいは優秀なハンターを派遣するなどの処置がとられる。世界は一見無秩序に動いているように見えて、その実、様々なシステムが組み合わされているものだ。

「ギルドが何のために組織され、発展してきたのか、少しはわかっただか？」

せつかく肉が綺麗に焼き上がったというのに、ヴァルカンは喜びを表そうとはしない。作業として、肉を切り分け始めるだけである。

前途有望な若者に聞かせるには少々早かっただろうか。ただ、社会というものはこういうものだ。一人の英雄の伝説的な行動によって変わるわけでもなければ、社会の構成する大勢の力で動いている。

一人の力では限界があるのだ。たとえ英雄が村を救うことができたとしても、モンスターから襲われることを防ぐ取り組みがないのであれば、英雄の知らないところで悲劇的な結末がいくつも起きていくことになってしまう。

「ヴァルカン、別に弱いハンターの方がいいなんて言ってるわけじゃないよ。ただ、ハンターにとって強さは手段であって、目的じゃありません」

アマランサスの言葉に合わせて、アレスも一つ話をすることにした。

「ハンターの中には、一生下位で終わる者もいる。お前はそれをどう思う?」

反応が鈍いが、敢えてヴァルカンの言葉を待つ。

「才能ねえんじゃねえの?」

声が小さい。だが、目的の言葉は引き出した。

「そのハンターは毎日森に分け入っては村にとって貴重な収入源である特産キノコを集めていた。お前が気軽に買っている薬草や青キノコとて、そんなどこかのハンターが毎日集めたものだ」

もっとも、今では栽培技術が発展しており、このようなハンターはだいぶ数が減った。だが、そんなことを、やはりヴァルカンは知らないようなので、もう一度尋ねることにする。

「生涯を下位で終えたハンターを、お前はどう思う？」

火がいつの間にか消えかかっているので、新たに薪を投げ入れる。火の跳ねる音に混じって、ヴァルカンの返事が聞こえる。

「悪くねえとは思っけどさ……」

これで、ハンターとして生きるということが、単に強大なモンスターを打ち倒すことではないということが、少しはわかっただろうか。ヴァルカンにとって目指してきたものはあくまでも漠然としたものでしかない。そのことに気づいてもらっただけの話だ。

今は多少しよ気ているようだが、ヴァルカンのことだ。明日にでもなればころつと忘れていくことだろう。それでも、今夜くらいは頭を使ってもいいはずだ。

ヴァルカンが焼いた肉を掴み上げる。口に放り込んでみると、その焼き加減は絶品であった。鍛冶屋の親父も言っていたが、この若造はハンターよりもよほど有望な道があるのではないだろうか。

胡坐をかいて、肘をその足につき立てている。その手の先に乗っかっているヴァルカンの顔は、ふてくされたようにも、苦いものを口に含んだようにも見えた。その頭を撫でるのはアマランサスである。

「ハンターにも色々な人や生き方があるっていうことですよ。別に、ヴァルカンの理想像を否定したわけじゃありませんよ」

子どもをあやす母のような笑みである。ヴァルカンは照れくさそうにその手を払う。

「ガキ扱いすんなよ」

まったく、アマランサスはすぐに男を甘やかす。

### 第三話「創痕の騎士とひよっこの奮闘」(後書き)

私も始めてモンスターハンターをした時の最初の強敵はドスランポスでした。

まあ、今は閃光玉で動きを封じたところを双剣で切り刻みますが、コツとして、すぐにたじろいでしまったため、後ろ足を斜め後ろから切りつけてドスランポスが後ずさっても刃が届くようにしておく

と乱舞が綺麗に入ります。

これはドスゲネポスなど、同系の鳥竜種にも使えるはずですが、もつとも、ドスランポスくらい、こんなことしなくても楽に倒せる気がしますけど。

#### 第四話「創痕の騎士と見えない敵」(前書き)

まだメイン・ターゲットの影も形も出ていません。

ただ、次話では確実に登場することになると思います。

この調子だと、終わるのはやはり七話くらいになりそうですね。

#### 第四話「創痕の騎士と見えない敵」

夜が更け、月明かりと焚き火の光がかすかに森の闇を裂く。

アレスはランスを肩にかけ、倒木に腰掛けていた。防具は身につけたままである。兜こそ被っていないが、その眼差しは闇夜を突き刺し離さない。

夢狩り人。これは夢の中でさえ狩りを続けているのではないかと噂されたことからつけられた通り名であるが、夢の中でさえ気を抜くことのないアレスが夜とは言え狩り場で油断するはずがなかった。

後ろから足音が聞こえた。しかし、アレスは振り向こうとせず、前の闇を眺め続ける。振り向く必要性を感じていなかったからだ。誰がいるかはわかりきったことだからである。

やがて、見当通りの人物がアレスの横に座る。赤いメイド服を着た女性、アマランサスである。

首は向けない。視線だけを横へ曲げる。

「ヴァルカンはどうした？」

訪ねたのはハンターの若造のことである。

「寝ました。今日は頑張っていましたから」

アマランサスは笑顔で答えた。それに対して、アレスは露骨に息を吹く。

「粹がっつてもガキだな」

ヴァルカンは上位ハンターとは言え、ハンターとして十分な経験を積んでいるとは言いがたい。今回の件は荷が重いのではないが、そんなことをアレスは考え始めている。

アマランサスは両手のひらを胸の前で合わせる。特に意味のある仕草ではないのだろうが、俗に言う癖というものである。

「あら、そんなとこ、可愛いじゃないですか」

「女の可愛いには理解できん」

ランスを座ったまま、前へと突き出す。密閉された火竜の骨髄は、この程度のことでは火を吹きはしない。その刃が向けられた先、茂みから小さなトカゲが現れては別の茂みに移っていった。

アレスはゆっくりとランスを肩に戻す。

そう、ここは狩り場である。それも、得体の知れないモンスターが縄張りになっている可能性があるような場所である。

アマランサスの声には、先ほどとは違い声の高さを抑えている雰囲気があった。

「アレスの言うとおりでしょうね。樹海の奥からモンスターが出てきた。これに間違いないと思います」

昼間の探索ではほとんど痕跡らしいものは発見できなかった。し

かし、すべてを回ることができたわけではない。たとえば、中心部に生えていた巨樹の頂上など、通常の手段では登ることのできない場所は調べていない。

反対に言えば、他の大型種さえ住み着いた痕跡がないのである。

「恐らく他の大型モンスターが住み着かなかったのも、ここが主の縄張りに含まれているからだろう。そうになると、よほどの大物だ」

並の飛竜ではあるまい。一度ギルドに戻って調べ直す必要があるようだ。何十年も前から住み着いているのであれば、目撃証言などが残されている可能性が高い。

巢立ちを迎えたばかりの若い飛竜が迷い込んだことも考えてはいしたが、今回の探索でその可能性はほとんど消えたと言ってもいいだろう。

「でも、そんな大物さんがどうして今になって出てきたんでしょうね」

気分転換に散歩でもしたくなったのか。恐らく、そんなはずはない。動物というものは人間以上に合理的な生き物である。おかしい理屈をこねない分、人間よりは動機が見えやすいということだ。

もっとも、それがすべてを理解できるということではない。

「わからん」

アレスは顔の横で手を振ってみせる。

最近は理解できないことが多いのだ。地震が少ないはずのドンドルマ地方で山を崩すほどの地震があった。もつと些細なことでもいいのなら、アマランサスが出た狩りでもそんなことは観測されている。

一季節前の繁殖期での話だ。アマランサスは女性のハンターと子育てを終えたディアブロス亜種二頭を狩った。繁殖期に子育てをすることは例年のことだが、問題はその期間だ。

「ディアブロス亜種を倒した時、巣はもぬけの殻だったんだな？」

狩りを終えた後、巣に踏み入った時ディアブロスの幼竜は巣立ちを終えた後であったそうだ。

「おかしいですね。繁殖期一杯子育てするはずなのに」

伸ばした人差し指を唇に当てて、アマランサスは如何にもわからないと言った仕草をする。

まだ何らかの異変を確定するには早いが、どちらにしる、この森で何か得体の知れないモンスターが変異を来していることに変わりはない。

「ヴァルカンを村に残した方がいいかもしれんな」

母親である村長はまるで死んでもかまわないようなことを言っていたが、冗談ではなくそうなりかねない。もつとも、あの母親の場合、どこまでが冗談なのか判然としないところがあるが。

聞こえてきたのはアマランサスの小さな笑い声。

「きつと怒りますよ」

目標とプライドばかりが高くて、周りが見えていないものだから  
尊大。勇敢と無謀を取り違えているような若者である。

ただ残念なことに、アレスの若かりし頃を含め、若者とはあのような傾向にある。

アレスはもう一度息を吹く。

「ガキなんてみんなあんなものか？」

英雄になれる気でいるのだろう。だが、世界とは英雄なんて必要  
としていない。一人の英雄などいなくとも問題ないが、数多くの優  
れたハンターがいなくては社会が成り立たないからである。

目標を掲げることが結構だが、まずは社会の仕組みを知ってもら  
いたいものだ。

ふとアマランサスの顔を見ると、何故かそこには満面の笑みがあ  
った。

「私から見たら、男の人なんてみんな子どもみたなところ、ありま  
すよ」

女というのは小ずるい。こんな時はいつも女であることを盾にし  
て男はこんなものだとか決めつけようとする。

アマランサスも、あの女もそれは変わらない。

「まだ、あの女に仕えるつもりなのか？」

こう言った途端、アマランサスの雰囲気が変わる。表情こそ変化は見られないが、明らかに柔らかな気配が減っている。

微笑むためにいつもは力の弱い瞼が、急に力を持ち、その瞳をはつきりと見せるようになる。

「姫様のことをあの女なんて言ったらだめです」

立ち上がるうとするアマランサス。その手を掴んでまでアレスはアマランサスを引き留めようとする。

「アマランサス、俺は……」

そんなアレスの頬に、アマランサスはそっと口づけをした。呆気にとられるアレスを後目に、メイド服の女性は顔を離す。

すると、そこにはすでにいつもの笑顔が戻っている。

「交代の時間になったら起こしてください。それと、髭はちゃんと剃ってくださいね」

つい、手を離してしまっていた。その隙について、アマランサスはアレスの側を離れていく。

しばらく放心していた。気づいた頃には、アマランサスはその足音さえ聞こえない場所にいた。

一人残されたアレス。頬には唇の感触が残る。

「男はみなガキか……」

アレスは、仕方なく寝ずの番に戻る。

ンガイ村工房の開け放たれた扉を、三人はヴァルカンを先頭には潜り抜けた。

ヴァルカンのハンター装備は泥にまみれ、埃をかぶり、草食種に踏み荒らされた跡は一見すると飛竜の突撃に耐えたように見えなくもない。

工房の主人であるウウルカヌスは朗らかな笑みで少年の帰還を出迎えた。

「しばらく見ない内に見違えた、ヴァルカン」

カウンターに肘を突き、ヴァルカンは応じる。ずいぶんと気取った格好であるが、そのこめかみには冷や汗がにじみ出していた。

「まあな」

ウウルカヌスは若造の顔を覗き込みながら、これ以上ないほど愉快そうに笑ってみせる。

「まるで失敗という失敗をしつくしたような面構えだな」

「やっぱり隠れて見てたんだろ！」

ヴァルカンはカウンターを叩き抗議の声をあげた。以前のアマランサスのスカートを覗こうとした一見にしる、狩り場での失敗にしろ、親方の勘の鋭さは健在である。アレスはわめくヴァルカンと入れ替わるように若者を押し退ける。すると、ヴァルカンは面白いほどあっさりと後ろへ倒れ、床を転げる。

「防具の方は？」

カウンターの上に、ヴァルカンに剥ぎ取り、採取させた素材をつめた袋を置きながら、アレスは尋ねた。

親方は後ろを指さしながら袋の中身を確認する。

「形はできとるよ。後は、こいつらで補強すれば完成だな」

示された先、そこには青い鱗で包まれた防具が飾られている。アレスが身につけているリオソウルに比べれば鎧という印象を与えるものではない。防御力と俊敏性を天秤にかけて、動き易さに重きをおいた装備である。

少なくとも、ぼろぼろのハンター装備に比べれば、随分と立派に見える装備である。

ランポス。一見すれば完成しているように見えるが、最後の仕上げは終えていないらしい。

「では明日の正午までに頼む」

親方が頷くことを確認してから、アレスは振り向いた。すると、

アマランスに打ちつけたであろう背中をさすられているヴァルカ  
ンが勢いよく立ち上がった。

「いよいよモンスター退治か？」

突き飛ばされたことも忘れて、元気なものである。確かに、これ  
で村に置いていくと言っては手がつけられないほど暴れることだろ  
う。初めは渋っていた割りに現金なものだ。

やむを得まい。アレスはお荷物を抱える覚悟を固める必要があっ  
た。

「ともかく姿を確認しなくてはな。うまくかかってくれればいいが、  
長丁場になるかもしれん」

そのまま工房の出口へと歩き出す。

「俺はギルドに立ち寄ってもう一度情報を集めてくる」

アマランスには、わざわざ指示をする必要はないだろう。アマ  
ランスは、何故かヴァルカンの介抱をしていた時の姿勢のまま、  
床に正座したままである。

「じゃあ、私は準備をしておきますね」

そうになると、ヴァルカンはアレスが面倒を看ることになるのだろ  
うか。この若者が準備のような地味なだけの仕事を進んでしたがる  
とは考えにくい。

ところが、ヴァルカンは意外な返事をした。

「じゃあ俺は、アマランサス姉ちゃんを手伝うかな」

ギルドが酒場を経営している理由は2つある。

一つはハンターの保安施設として機能しているとともに、厄介ごとをギルドの側で処理できるということにある。

また、ハンター以外の利用者も多く、情報の集積装置としても機能する。

別段ギルドが酒場を独占経営しているわけではないが、ハンターがギルドが運営している酒場以外の場所に行くメリットはほとんどない。

よって、アレスもギルド直営の酒場以外利用したことがなかった。そのかわりとして、勝手というものはわかっていづつもりである。

酒場の中は昼間であることもあって人影はまばらである。また、村の規模の割に決して大きなものではなく、カウンターの奥では緑の制服を着た受付嬢が何やら退屈そうにしていた。

襲われた商隊の話聞いていた際、その場に居合わせた受付嬢である。アレスが近づくと、相手もすぐに気づいたようで、様々な資料をカウンターの上に並べてくれた。

「樹海に生息が確認されている大型種はそんなに多くはありません」

雌火竜リオレイア。迅竜ナルガクルガ。眠鳥ヒブノック。棘竜工スピナス。

これまで、樹海のように樹々が大量に生い茂っている場所で生息が確認された大型種である。

リオレイアとヒブノックは生息派範囲が広く、さまざまな地方で確認されている。しかし、エスピナスとナルガクルガについてはその理由こそ不明ながら、生息している地方が限られている。

「この地方にナルガクルガは生息していないはずだが」

漆黒の体毛を有する非常に特異な飛竜である。とにかく動きが早く、軽い身のこなしで樹々の間を跳び回っているのだそうだ。

樹海に特化した種であるため、恐らく樹海から抜け出すことができないまま生息している範囲が限られるのだろう。

少なくとも、近傍の森でナルガクルガが目撃されてという情報は耳にしていない。

受付嬢はアレスの言葉をかまった様子などなく断言する。

「まだ除外できる段階ではないと判断しました」

確かに、情報が少なすぎる。今の段階ではいくら資料を覗んだところで何も変わりはない。

「君の意見でいい。どんなモンスターだと考える？」

受付嬢は考え込んだように口元に手をやって、その手はずさな  
いまま、アレスを見た。

「リオレイアでしょうか？」

示されたのはデフォルトされたリオレイアの姿が描かれた資料。

「雌火竜なら温暖期の間は子育てを終えていますから、比較のおと  
なしはいはずです。それに樹海で巣を作ることには確認されていませ  
んから、商隊が無事であったことも領けます」

商隊が直接襲われなかった事実を論拠にしているらしい。確かに  
それは大きいですが、リオレイアのいた痕跡は確認できなかった。その  
ことに加え、流れの飛竜であるのなら縄張り意識が弱く、人を襲う  
ことは稀なはずである。

「なるほど」

こんな考えがつい声に出たのだろう。受付嬢からの言葉は、それ  
こそご不満そうである。

「ご不満ですか？」

否定したいわけではないが、どうにもリオレイアでは納得できな  
い。

「聞いておいて悪いが、俺自身奴の正体を掴みかねている。襲撃さ  
れた現場の話はしっかりと聞いたつもりだったが、皆目見当がつか  
ない」

現場検証はギルドの方で行っていると現場に向くつもりはなかった。襲撃現場は樹海の中でも相当浅いところであり、そこを探るよりはより深い場所の方が確率が高いと考えたのだ。

だが、結果は空振り。後は忍耐を頼りに持久戦しかないような有様である。

受付嬢がリオレイアの資料を押し退け、取り上げたのは、どうやら現場検証の資料であるようだ。

「私も検証には参加しましたがけど、やはり駄目でした。土が大きく掘り返されているだけで、足跡のようなものはどこにも……」

姿がなく、痕跡も残さない。

アレスはつい笑ってしまった。

「もしかしたら、古龍の仕業かもしれないな」

受付嬢も思わず笑う。

「そんなおとぎ話の中だけの存在ですよ」

では、おとぎ話の連中が、ふらりと迷い出ていないことを祈るばかりである。

ハンター御用達の店に入るなり、様々な臭いが混ざった空気がアマランサスとヴァルカンを包んだ。一般人にはむせ返るほどの臭い

であるが、狩りに慣れたアマランサス、そしてヴァルカンも平然と店内へと足を踏み入れる。

あまり狩りが活発でない村らしく、店内はこじんまりとしたものであった。大きな棚が左右に並び、様々なアイテムが雑多に並べられている。床にはいくつも籠が置かれ、やはりアイテムが大量に放り込まれている。

奥へと目をやれば、ギルドの制服を着た受付嬢が笑顔で出迎えていた。アマランサスは笑顔で手を振り応えた。

そうしている内に、ヴァルカンはアマランサスの脇を抜けて店の中へと入っていた。手には籠。ずいぶん手慣れた様子で品物の物色を始めている。その様子をアマランサスはい眺めていた。すると、ヴァルカンは首だけで振り向いた。

「大体何日分くらい必要だ？」

三日分もあれば。とりあえずそう答えておくと、ヴァルカンは再び品物に目を戻す。狩りには直接関係なくとも、狩り場に比較的長くにわたって滞在するための道具を中心に選んでいる。

アマランサスはヴァルカンに任せることにした。ちょうど反対側、ポウガン用の弾が放り込まれている籠の前に腰を下ろす。ヴァルカンはちょうど背中合わせの状態である。

メイン・ターゲットであるモンスターの正体がわからない以上、多様な弾を持っていくつもりである。特に状態異常弾と呼ばれる弾はモンスターに直接猛毒や麻痺毒を注入できるため重宝する。もっとも、効果の高いLV2の弾は比較的製造が面倒なためか、売って

いる店は限られてしまう。残念ながらここにはないようだ。

そもそも、多様な弾が籠にはごちゃ混ぜのまま放り込まれているため、アマランサスは手探りで目的の弾を探す必要があった。とりあえず毒弾LV1を見つけて、近くの買物籠へと振り込んでおく。

さて、このまま探しものをしていても退屈してしまう。そう考えたアマランサスは背中をむき合わせたままヴァルカンへと話しかけることにした。

「ヴァルカンは英雄になりたいんですか？」

返事がほんの少し遅れたのは、急に話しかけられたことへの戸惑いだろう。返事自体に迷いを感じることはなかった。

「どんなモンスターからでも村を守りたい。そんなところだな」

ヴァルカンの話を聞いている間、つい手が止まってしまっていたため、また弾を探す作業を再開する。次に見つけたのは貫通弾LV2。

「シエンガオレンの時はどうしてました？」

繁殖期の際に、ドンドルマの街を襲ったとてつもなく大きな甲殻種のことである。アマランサスとはある事情から街を離れていたが、ヴァルカンはいたはずなのだ。

音がしていることから、作業の手は緩めていないのだろう。

「バリスタや大砲バンバン撃ち込んでやった。それや、崖の上から

岩落としたりな」

街を防衛する施設を様々使ったらしい。ただどれも、ハンターとして武器を手に狩りを行う手段ではない。ここにアレスがいたなら、お前はそれでもハンターかと怒鳴り散らしてしまえそうだ。

すぐに向きになるランス使いのハンターの顔を思い浮かべて、アマランサスはいい顔の筋肉が緩む。その微笑んだ顔のまま、返事をする。

「頑張ってたんですね」

自身の活躍を思い浮かべて機嫌をよくしたのだろう。色々と気が大きくなっているらしい。

「アマランサス姉ちゃんは、何かこれまでデカ物と戦ったことは？」

こつ聞かれて、色々なモンスターを思い浮かべる。その中から、とても聞かせられないモンスターをまず除いて、残りのモンスターの中からお目当てのモンスターを思い浮かべる。

テイルテュというハンマー使いの女性と共に砂漠の夜風を受けたあの日のことを。

「そうですね。公式にはデュアブロス亜種二頭と二人で戦ったことでしょうか？」

何かを取り落としたような音が後ろから聞こえた。

「公式って、まさか野良で狩ったことあんのかよ？」

公表できない狩りのことを、ギルドの管理下にならない違法な狩りと勘違いしたらしい。ギルド直営の店で何を言っているのか、そんなことを考えたのだと想像することは難しくない。アマランサスは至って普通に弾を選んでしたが、ヴァルカンが発する音はリズムが不規則になっている。

普段は一人で平気みたいな顔しながら、母親には頭が上がらなくて、ルールを守ることに忠実なヴァルカン。そんなところを、アマランサスは可愛いと評した。

「まさか。そんな身勝手なことしません」

しばらくして、本当かと、小声で確認をとってくる。もちろん、そう返すとわかりやすいくらいに大きな安堵の吐息が聞こえた。ようやく、品定めのリズムが均一に戻る。

「でもさ、野良は厳禁なんだろう？」

アマランサス脇の籠はそろそろ弾でいっぱいになりつつある。

「当たり前ですよ。ギルドの管理外での狩りは狩る人にも、その付近で暮らす人にもとつても危ないことですから」

ギルドの支援は受けられないことはもちろんのこと、不測の事態が起きても救助が来る当てがない。加えて、ギルドが調査を終えていない地区に無断で入り込んだ場合、どのようなモンスターに遭遇するかわからない。ギルドの管理が行き届いている場所でも、新たに開拓された場所では時折凶暴竜イビルジョーのような特定の縄張りを持たず徘徊する種が紛れ込んでくる可能性がある。

加えて、ギルドとは狩りの安全を図るばかりの組織ではない。生息頭数の概数を把握し、生態系の保全に努めてもいる。もしギルドのあずかり知らぬところで狩りが行われた場合、どのようなことが起こるのか想像がつかないところがある。

例えば、勝手に食物連鎖の頂点に立つ飛竜を狩ってしまったとする。すると、それが餌にしていた草食種の数が増え、それを食糧として別の肉食性のモンスターが爆発的に数を増すかもしれない。それはうまく自然の中でバランスをとるかもしれないが、場合によっては人里近くにまで降りてきて、人や家畜を襲う恐れがある。

また、そうするメリットもあまりない。そのことを、ヴァルカンはため息混じりに話した。

「大物を一頭しとめれば1年は遊んでくらせる。そんなんだったら、野良してでも狩りたくなるかもな」

ハンターは決して見入りのいい職業ではないのだ。勿論、気前のいいパトロンに内密に狩りを行って欲しい、そんな話でもあれば別だろうが、決してお金になるものではない。

ギルドの追及から逃げ続ける苦勞と、より大きな危険性、さらにハンターの間でつまはじきにされることから、野良のハンターなど極めて例外的な存在でしかない。

「実際、お金が欲しい人はハンターにはなりませんよ。場合によっては準備にだってお金がかかりますし、それに命の危険もありますからね」

弾は選り終えた。決して重いものではないが、持ちやすさを優先して籠を両手で抱える。すると、何をどう捉えたのか、ヴァルカンが突然振り返るなら叫んだ。

「お、俺は違うぞ！」

まだあどけなささえ残る顔は必死にその目を大きく開けている。

そう、ハンターとは人々の命と生活を守る志を持つ人々の集まりである。命の危険を即物的な対価でしか贖えないものは他の道を選ぶ。このヴァルカン少年のような若者が、ハンターの明日を担う。

両手が塞がっていなかったとしたら、頭を撫でてあげたいくらいである。

「わかってますよ」。ヴァルカンは立派です」

初心な若者は、微笑みかけると照れくさそうに顔をそらした。その際にヴァルカンが抱えている籠の中へと視線を落とす。三人で三日分。その要求に見合うだけのアイテムが整然と並べられていた。まったく、何か特別言い含めておくことはない。

そのまま、置くのカウンターへと籠を持っていく。そのアマランサスのすぐ後ろをヴァルカンがついてくる。

弾は結局、状態異常弾の他、通常弾に貫通弾。そんなどんな相手にも性能を発揮する汎用性の高いものである。その合計した値段は、三人分の雑貨よりも割高である。

提示された金額を耳にするなり、ヴァルカンはまるで怯えたよう

な大げさな動きをして後ずさる。

「ガンナーって、そんなに金かかるのかよ……」

若いハンターには、まだまだ知識の偏りがあることは確かかなようだ。

#### 第四話「創痕の騎士と見えない敵」(後書き)

次話では、少々展開を急いで一気にモンスターを登場させてしま  
いましょう。

ただ、メイン・ターゲットが出てくるかはわかりません。

それと、次話には登場しますので、ヒントをもう一つつけておき  
ます。

棘竜エスピナスではありません。

## 第五話「創痕の騎士と巨龍の息吹」(前書き)

いよいよ今回のボスマンスターが登場します。私がフロンティアをしている時にとても印象に残ったモンスターです。フロンティアをご存知の人にもあまりなじみがないこともあれば、したことがない人でも縁がある不思議なモンスターです。

では最後に一言。

怒らないで下さい。

## 第五話「創痕の騎士と巨龍の息吹」

主は苛立っていた。

居城に、何者かが土足で踏み込んでいる。

姿は見えない。だが、その存在を全身で感じるのだ。

自分を脅かすほどの強力にして強大な存在を。

主は苛立っていた。

樹海への道は、平坦ではないとはいえ木々のよけ方になれてしまえば大したことはない。大樹の太い根を乗り越えて、比較的踏みしめやすい足場を選んで歩く。

先頭はアレス。リオレウス亜種の甲殻と鱗を使用した鎧を軽々と動かし、森を突っ切っていく。

そのすぐ後ろからは、全身が青い鱗で覆われた軽装の防具をまとったヴァルカンの姿がある。まだ動きには無駄なものが多いが、辛うじてアレスと距離を維持したまま追いつがっている。

殿はアマランサスが務め、こちらは鼻歌交じりで軽快な足取りを見せている。

三人は互いの声が十分に通るほどの距離にいる。ハンターとして、

話の内容は先程から未知のモンスターのことで持ちきりである。

「やはり俺はエスピナスを推す。論拠には乏しいが、毒を持つ生物はやはり周りから一目おかれるものだ」

大きな葉が行く手を遮ったため、力任せに押し退ける。アレスが通る分には申し分なかったが、反動で戻った葉はヴァルカンを直撃したらしかった。

ひっくり返ったカエルのような悲鳴がした。

「私はナルガクルガだと思えます。足跡がないことも、ナルガクルガが木々を飛び回る習性を考えたら問題ありませんもんね」

アマランサスは葉をうまくさけたらしい。もっとも、こんな葉に当たっている方が問題なのだが。

痛てて。こんな情けない声をおいてから、ヴァルカンは遅れを取り戻そうと小走りに足音を早める。

「ヒプノックだったの。はじめはどんな奴がいるんだなんて考えてたけどさ、結局森は平穩そのものだろ。いてもこいつくらいだろ」

思い思い好き勝手なことを言い合う。どうしても木々を避けながらの移動であるため、意識がそれることが多い。下手に議論をしようとするよりも、互いが言いたいように言っているくらいしかできない。

足は木々を踏みつけて進む。天気はよく、木漏れ日が十分に足下を照らしてくれる。これなら余計なことに神経をすり減らす心配は

ない。

少々風が強いことが難点か。

足を止め、上を見上げる。上の方で、葉が風になびいていた。木の根本では風を感じるほどではないが、何か、この風には不自然なものを感じてしまう。

アレスが止まったことに気づかないヴァルカンが歩く速度そのままアレスの背中にぶつかった。何やらわめいているが、無視しておく。

風がおかしいのだ。通常、風は不規則に流れる。しかし、上空に見える風はどこか規則正しく、等間隔で木々を揺らしている。

しかもご丁寧に風が吹いてくる方向はこれからアレスたちが向かうおとしていいる樹海である。

何かが起きている。そんな考えが頭をよぎると、首は自然と樹海の方を向く。すると、風が木々の間を吹き抜けた。そのことを体で感じる必要はなかった。目で見てわかったからだ。

風は霧を運び、それは瞬く間にアレスたちの体を包み込んだ。

決して濃い霧ではないが、日は遮られ、視界は途端に悪くなる。多少意識して見なければ、足下もはつきりとは見えないほどである。

どこかの馬鹿が不注意にも歩きだそうとして、根に足を取られて背中から転んだ。そんな姿ならすっかりと見えている。

首を下に向ける必要があった。

「こんなことは今までにもあったのか？」

ヴァルカンは自分で自分の背中を器用にさすりながら立ち上がる。

「いや、初めてだ……」

確かに、気温、湿度、天候を考慮すると、霧が発生するような状態とは思えない。何より、この霧は体にまとわりつく妙な固さがあった。振り払うおうと腕を振ると、霧の揺らぎが確かに伝播していく手応えというものがあつた。抵抗を覚えるほどではないにしろ、この霧は確実に視界を妨げる。

迂闊に動くことはできない。一〇m程度なら見えるが、それ以上となるとすぐに霞んでしまう。また、ここは樹海。樹が障害物として作用する以上、仲間の位置を把握していなければならぬ。

アマランサスは目を閉じて辺りの様子をうかがっている。特に何かを感じた様子はなく、このメイドが危険を感じていないなら危険はないだろう。問題は、何を仕出かすかわからない若造にある。ヴァルカンは手ごろな太さの枝を拾い上げると、布を巻きつけていた。松明代わりにするつもりなのだろう。右手で枝を持ちながら、左手には片手でも着火できるよう加工された火打石が握られている。手慣れた様子で、石と石とを打ち合わせる音がしたかと思うと、火種はすぐに松明に燃え移る。

灯された明かりが霧を照らす。徐々に火が布を燃やしながら広がっていく。松明に霧が吸い込まれるように撒きついた。かと思うと、突如、火が燃え上がる。松明ばかりではない。空気そのものが燃え

ている。

慌てたヴァルカンが思わず松明を取り落とす。土に塗れながら、それでも火は消える気配がない。霧を介して燃え広がるかとさえする。

まず土を蹴り上げ、松明に被せる。火を弱めることはできたが、完全に消えてはくれない。足で火を踏みつけることで消火することに成功する。

「燃える霧だと……」

明らかに霧が燃焼を促進していた。松明に火を灯した途端に発火したわけではないため、ある程度の密度を必要とするのだろう。それでも、燃える霧など異常以外の何者でもない。

再び風が吹く。どうやら、霧は一時的にこの付近に貯まっていただけであつたらしい。風に吹き散らされ霧散していく。もっとも、霧はまだ薄つすらとはかかつており、視界が完全に晴れたわけではない。

この風が何を運んできたわけではないだろう。それでも、アマランサスは確信を持って目を開いた。その視線は樹海の奥を捉えていた。

「今日はいるみたいですね」

同じく樹海の奥へと目をやる。その時のことである。甲高く、つんざくような音が轟いた。

以前探索を終えた地区、その東側は広い草原になっている。中央に大樹が存在するため、その面積ほどの開放感はない。樹によって分断されているため、開けた場所がどれも狭く感じられるためだ。

目標とするモンスターの姿は、その中央の大樹、そのすぐ傍にあった。

霧がかかっているため、その姿ははつきりとは見えない。しかし、見間違えることはない。

鮮やかな橙色が何よりも目立っていた。褐色の足は細く、軽やかさよりもしなやかさを感じられる。飛竜の多くがそうであるように二本の足で体を支え、首は前へと突き出されている。しかし、その顔には牙はなく、鋭いクチバシが伸びている。その体を包むのは羽毛であり、たたまれた翼、そして、扇状に広がる尾羽が鮮やかな橙色をしていた。

ランポスと同じく、いや、それ以上に鳥としての特徴が色濃い。鳥竜種ヒプノックである。体内に麻酔作用のある薬剤を貯蓄し、必要に応じて吐き出すことから眠鳥の異名をもつ大型種であった。

確かに大型種に違いはないが、鳥竜種は比較的大人しい種が多い。進んで人を襲うことは少ないはずだ。加えて、商隊を率いていたメリクリウスの話では聞いた声は決してヒプノックのものではなかったと証言している。ヒプノックは確かに強靱な喉は有しておらず、大気を鳴動させるほどの音量を発することはできない。

アレス、アマランサスはまだ騒動の主がヒプノックであるとは決

め切れていない。広場の入り口に立ったまま、様子をうかがっていた。

それを無視して歩き出すのは、やはりヴァルカンである。薄い霧を裂きながらその足はどんどんヒプノックに近づいていく。

「ほら見るよ！ やっぱりヒプノックだろ。まったく、メリクルウスのおっさんは早とちりなんだからな」

その声は得意気であった。今にもスキップでも始めそうな様子で、ヴァルカンはどどん、どどんヒプノックに近づいていく。まだまだヒプノックの元にまでたどり着けないでいる。

見える大きさから判断するに、ヒプノックは決して遠くにいるようには見えなかった。距離間がおかしい。霧に隠されてはつきりとはしていなかったのだが、見上げるほどに高いはずの樹が広げる枝がヒプノックの背中にかかっていた。

「ねえ、アレス、何だか縮尺がおかしくありませんか？」

ヒプノックの大きさはせいぜい、二m程度の高さしかない。だが仮にそんな常識を無視できるとすれば、ヴァルカンがいつまでもヒプノックにたどり着かない理由も、ヒプノックの体が枝に届いてしまっ訳も説明がつく。

「俺は自分で目にしたものしか信じないが、目にしたものは疑わないことにしている！」

アレスとアマランサスが走り出したのはほぼ同時であった。霧が纏わりついてくるが、速度を抑えられるほどではない。二人分の足

音を聞きつけ、ヴァルカンはいまだに状況を把握していないようにとぼけた様子で振り向く。

「慌ててどうしたんだよ？」

騎士とメイドにはすでに若造の様子は見えていなかった。その向こう側でヒプノックがゆっくりと、しかし重厚な足取りで歩みを進めていた。その足は、片足だけで飛竜の胴体ほどの大きさがある。なるほど、足跡が大きすぎて、そうと認識できなかったことも頷ける。

間違いない。こいつが、このヒプノックが、この樹海に君臨する主である。

その姿は巨大。通常のヒプノックの三倍から四倍の高さがあり、アプトノスほどの大きさがある顔に輝く人の頭よりも一回り大きな眼がアレスたちを捉えている。

ここで、ヴァルカンもようやく事態の異常さに気づいたようだ。顔を前に戻すなり、徐々に首を上に向けていく。その目がヒプノックの大きさを捉えるにつれ、体がこわばっていきことがまだ追いついていなくともわかる。

ヒプノックはもはや翼とも思えないほど巨大な翼を振ると、風が霧を払う。人を丸呑みにしてもあまりあるクチバシが開かれると、霧の中で聞いた声が世界に溢れた。ヒプノックが敵を見た時に行う威嚇である。霧が揺れ動く。巨大な喉から発せられた咆哮は鳥のさえずりどころではない、まさに鳥の竜であることを力ずくで宣言する竜の轟きであった。

来る。

巨大なヒプノックが地を踏みしめる。それだけで、緩い振動が大地を伝い、足をくすぐる。大樹ほどの大きさであるというのに、ヒプノックは通常のものとは変わらない動きで跳び上がった。そのままヴァルカンの頭上を通り抜け、アレスたちへとその巨大なクチバシを振り下ろす。

合図など送り必要はない。アレスが横へ飛ぶと、ほぼ同時にアマランサスが地面を蹴る。クチバシは土へと深々と突き刺さると、即座に引き抜かれ二度、三度と地面を掘り返す。背の低い草に覆われていた土は耕され、土くれがむき出しとなった。

相当苛立っているようだ。あんなクチバシをまともに喰らっては如何に蒼火竜の甲殻が頑丈と言えどもただではすまない。やはり、ヴァルカンを連れて来たのは失敗だった。ギルドの管轄外のクエストに素人の同行を許すべきではなかった。

見ると、ヴァルカンはヒプノックを見上げたまま動こうとしない。その顔には不随意の震えが見られた。何のことはない。怯えているのだ。恐怖に駆られ動くことができないのだ。

「走れ！ 潰されたいのか!？」

全力で駆け寄りながら怒鳴りつける。しかし、ヴァルカンは動こうとしない。そうしている内に、巨大なヒプノックがよりにもよって若造に狙いを定めた。

覚醒を待っている余裕はない。アレスはヴァルカンを横から突き飛ばした。何の構えもしていなかったヴァルカンは軽々と飛ばされ、

地面と転がっていく。

そして、ヒプノックの足がアレスの胸を突き上げるとその体を軽々と跳ね上げた。ヒプノックにとっては軽く足を払った程度のことなのだろうが、飛竜の突進をまともに浴びたような鈍痛に見舞われる。宙を飛んでいる感覚がしばらく続いたと思うと、背を強打する痛み。次にアレスが気づいた時には、大樹の近くでうつ伏せに倒れていた。

起き上がろうと腕に力を込めようとするが、痛みが酷く力が入らない。軽い脳震盪でも起こしたのか、視界が二重にぼやけて見える。だが、見えていないわけではない。閃光玉の目を潰すほどの輝きを確認することができた。アマランサスが放ったのだろう。

赤い色がすばやく近づくなり、アレスを起き上がらせる。肩をかしてもらえると、なんとか歩くことくらいはできそうだ。

「一度引きます。歩けますね、アレス」

頷くが早いか、アマランサスはアレスの肩を担いで歩き出した。闇雲に暴れる音がするのは、視界を塞がれたヒプノックが暴れているためだろう。

「走りなさい！ ヴァルカン！」

果たしてヴァルカンが動いたのかはわからない。ただ、アマランサスが躊躇なく歩を進めたため、付いてきているのだと判断した。

視力が完全には回復せず、どこを歩いたのかわからない。巨大なヒプノックから逃れるために歩いた距離は、決して短くは感じなか

った。やがて、アマランサスが足を止めると、アレスはなだらかな坂に静かに横たえられた。

息苦しい兜を外してから、全身から力を抜く。あるいは、抜けていくとした方が正しいだろうか。

安静にしていたため、次第に視力が回復する。見回すまでもなく今いる場所が小さな洞窟であるとわかる。ガラクタの山や地面に放置されている不恰好な仮面。どうやらここは獣人種の住処として使われていた場所であるらしい。恐らく、人には価値のないガラクタを収拾する癖を有し、奇妙な仮面をつけることから奇面族と呼ばれるチャチャブーがここに住んでいたのだろう。洞窟は狭く、これなら例のヒプノックどころか大型種が入ってくることもできそうになり。

ここなら安全なはずだ。力を抜いて体を休める。アマランサスが傷を見ようと鎧を脱がしていた。手際よく胴装備が外されると、下に着ていたシャツに薄っすらと血が滲んでいる。衝撃の大半は鎧が受け流してくれたようだが、さすがに無傷というわけにもいかなかったようだ。シャツが捲り上げられると右脇腹に裂傷がうかがえた。

「どこか痛みますか？」

アマランサスが触診しながら、傷が内部に及んでいないか確認している。大丈夫だと声をかけると包帯を取り出し、治療に入った。

そうしている間、アレスの目にはしょぼくれたヴァルカンの姿が見えていた。唇を震わせ、目じりに不自然な緊張が見える。まったく、今にも泣き出しそうな顔というのは、今のこいつのような表情を言うのだろうか。顔を背けたまま、いつまでもこちらを見ようとし

ない。

「村に戻れ。お前にこの狩りは無理だ」

ようやくこちらを向いた。もつとも、そんな情けない顔を見たか  
つたわけではない。

「でも俺……！」

「モンスターを前に震えて動けないでは話にならん」

少しは気概を見せようとしたのだろう。だが、一言言ってやった  
だけで何も言い返せないまま走り出した。洞窟の奥の方へとヴァル  
カンは走り去っていった。

いい薬になったことだろう。これであんな若造も身の程を知った  
ことだろう。問題はあの巨大なヒプノックだが、アマランサスが  
いるなら何とでもなる。

アマランサスは包帯を巻き終えるまでの間、普段と変わらない表  
情を続けていた。

「この方があいつのためだ。あのヒプノックの相手はあいつを庇っ  
た状態ではできないからな」

「私は何も言ってますんよ」

悪戯っぽく笑うアマランサス。ヴァルカンのことをそんなに意識  
しているのだと言外に伝えているように思える。別にあんな若造が  
どうなるうとしたことではない。だが、つい庇ってしまった。何

を言っても変に取り繕っているようにしか聞こえなくなってしまう。

「アレスも心配なんですね、ヴァルカンのこと」

「勘違いするな。俺はあいつのことはどうでもいい」

本当にアマランサスは楽しげに笑う。何か言い返してやりたい。だが、そもそもアマランサスは反論さえしていない。女というものは男をがんじがらめにする術を憎らしいほどによく知っている。

わかりました。勝手に何かを納得した様子のアマランサスは立ち上がると、アレスの頭を撫でた。振り払ってやりたくとも、まだ体を動かせる状態にはない。

「ちょっとヴァルカンの様子を見てきますから、ちゃんと寝てなきや駄目ですよ」

体はやはり動かせない。アマランサスは手を振って、ヴァルカンの走り去った方へと歩いていった。身動きも反論も封じられてしまい、悔しさを噛み締めるアレスを残して。

洞窟は案外短く、走るとすぐに外に出ることができた。区画の西側。樹海にしては樹が少ない。決して広いとは感じられないまでもまとまった広さがあるため、東側とは反対に面積の割りに広く感じる。西川は一面湖になっている。樹海に水棲の大型種が棲息しているなんて話は聞いたことがない。それに、縄張りを考えれば、あんなデカ物の傍に大型種がいるとも思えない。

ヴァルカンは湖のほとりに腰を降ろした。足を差し込むと、冷たい感触が広がる。水に湿った布が張り付く感触は決して心地よいものではなかったが、今はあまり気にならない。

どうして自分は動けなくなってしまうのだろう。今日がはじめてのことではない。これまでも大型種を前にした時、怖くてたまらないことが何度もあった。勇敢なハンターになりたいはずなのに、どうしても体が震えて止めることができない。

力任せに水面を叩く。水が飛び散り、顔にかかった。水面には泣いている自分の顔が歪んで映っている。

「みつともねえ顔だな……」

片手で水をすくうと、顔に浴びせる。これで、涙を誤魔化したところで、モンスターから逃げ出してしまった、いや、逃げることさえできなかった事実は何も変わらない。惨めで、居たたまれなくてそれでもこれ以上樹海に留まっても何もできないことも頭では理解している。

見返してやりたいのに、それができないことがわかってしまう。

もう村に帰って、あのヒプノックは二人に任せた方がいい。最初からそのつもりであの二人に同行をお願いしたのだから。

ウウルカヌスの親父の言うとおりだ。ハンターになんか向いていない。母さんだっけきつとそう思って同行させたのだろう。また醜態をさらせばもうハンターでいようなんて考えない、そんなことを期待していたに決まってる。

本当にその通りだ。

もう村に帰ろう。そして、ハンターをやめよう。昔村を訪れたハンターに憧れて、自分もあなりたい、なればいいとハンターを目指した。でも、結局自分には無理な話だった。高望みの夢でしかなかった。

そう決めたはずなのに、いざ腰を上げようとしても上がらない。動けないわけじゃない。でも心のどこかでまだ未練があつて、どうしても動き出す気になれなかった。

「俺って、やめる度胸さえないのかよ！」

拾い上げた石。それに何の罪もないとはわかつていても、つい八つ当たりをして湖へと放り投げた。波紋を立てて、石はあっさりと水中に沈んでいった。まるで堪え性がない。今のヴァルカンみたいに。同類が沈んでいく様を眺めていると、ヴァルカンの横を石が通り抜けた。石は鋭い角度で水面にぶつかると、数えるのが面倒になるくらい跳ねて見えなくなるくらい距離を稼いでようやく沈んだ。

随分としぶとい石もあるものだ。

振り返ると、沈んだ緑が支配する樹海の中で鮮やかな赤が目に入る。アマランサスがやはり微笑みを絶やさないまま手を振っていた。

## 第五話「創痕の騎士と巨龍の息吹」（後書き）

ヒブノック希少種？をメインターゲットとするフロンティア・クエストが実際一時期存在しました。ともかく大きなヒブノックで、剣士系では足にしか攻撃を当てることができせん。

それなのに通常の大きさのヒブノックとステータスは同じ、素材も同じ、体力さえも同じものですから見掛け倒しというネタ・モンスターでした。

同じフロンティア限定のモンスターならエスピナスがいますけど、さすがにヒブノック希少種？を登場させるのは私くらいだろうとつい狙ってしまいました。

さて、正解された方はいましたでしょうか？

エスピナスを期待されていた方にはすいません。

余談ですが、フロンティアにはヒブノック、亜種もいれば希少種もいます。こちらは蒼と白で、大きさも普通です。

## 第六話「創痕の騎士と始まりの始まり」

湖へと向けて、ヴァルカンは石を放った。座ったままでは力を入れにくい、そう言い訳しても無意味なくらい石はあっさり沈んでしまう。これを、隣りに座るアマランサスはどう思っただろうか。つい気になって横へ視線を送ると、微笑むメイドと目があつた気恥ずかしさにすぐに目をそらす。

「ヴァルカンがこれまでどんな狩りをしてきたのか、当ててみせましょうか？」

アマランサスは両足を抱えるように座っていた。つま先を湖に浸して、ちょうど横にいるため、ちよつと前かがみになるだけでその顔はヴァルカンの表情をうかがえる位置にきてしまう。

「強い人に憧れてパーティに入れてもらった。それでも狩りの腕は上達しなくて、上達しないからどんどん自信をなくしていった。それでも足手まといになんてなりたくないから、必要なアイテムの採取や準備をして仲間を支えていた。すると、いつの間にか上位と呼ばれるハンターになっていた。違いますか？」

そこまでわかっているなら答える必要なんてない。

「ヴァルカンは、本当に人のためになる狩りをしていたんですね」

「やめてくれよ。単に一人じゃ何もできないってことだろ！」

八つ当たりだとはわかっているけど、怒鳴り声は抑えようがなかった。

「私は、モンスターにとどめがさせる人がすごい人だとは思いませんよ」

「わかつちやいるさ！ でも、俺は駄目なんだ。小型種相手なら平気な癖に、ちよつと大型の奴を相手にすると震えが止まらなくなる！ そんな奴のどこがハンターなんだよ！」

はじめはそんなことなかった。でも、一度火竜リオレウスと戦った時、大きな怪我をした。それ以来、大型種に挑むことが怖くなった。怖くて狩れないから自信をなくして、自信がなくなるとどんどん怖さが増してくる。

いつしか大型モンスターを前にしただけで足が動かなくなっていた。強気な態度を試してみたり、空威張りをしてでも心を強く持とうとした。そんなこと、何の意味もないってわかっていながら。

「肩肘張り過ぎなんですよ、ヴァルカンは」

アマランサスの指が頬をつついてくる。馬鹿にするな。そんな気持ちで手で荒々しく払いのけようとした。すると、その動きを読んでいたように、アマランサスはヴァルカンの腕を難なくかわしてしまふ。

「なっ……」

呆氣にとられて、つい気が抜ける。

アマランサスは普段と変わらずとぼけた顔なのに、今ヴァルカンを見つめる視線はどこか、反らしがたい雰囲気を含んでいた。

「弱肉強食ってわかりますか？」

自然の中で、肉食の飛竜が小型のモンスターを餌食にする。そんなことを端的に示した言葉。

「この言葉、ただ強い人が一番偉いって言うてるわけじゃありません。草食種のお肉を飛竜種が食べて、やがて飛竜種もその命を全うして土に還って草木を育む。それがまた草食種を慈しむようになる」

世界は強者のためにあるわけではなくて、強者としてこの世界の一部にすぎない。そんな当たり前のことを、アマランサスはわざわざヴァルカンに伝えようとしてくれている。

「とても強い飛竜がいたとして、その飛竜だけで世界が満たされることなんてあると思いますか？」

結局、これまでにアレスやアマランサスに散々言われたことをもう1度言われているにすぎない。世界は無秩序に見えても、その実調和がとれていて、生物は其中でその命を必死に繋いでいる。

草食種が惨めだなんてことはない。飛竜種でないことがみつともないことなんかじゃない。きっと、伝えたいことはこんなこと。

「でも、俺食われるのはやだ……」

アマランサスは息を抜くように微笑みを強くした。視線が不思議なくらい和らぐ。

「ものたですよ。それに、そんなところが肩肘張ってます。」

俺が飛竜どもを生かしてやってるんだって思えないんですか？」

「無茶言うなよ」

草食種だつてそう誇りながら死んでいくわけではないだろう。

「でも、世界はそういうこと。自然とはそんなものです。一つの大きなシステムの中で、それぞれがそれぞれに生きています。私もヴァルカンも、あの大きなヒプノックも」

前触れなしにアマランサスは立ち上がった。立ち込める霧の中、少し離れるとその顔は見えなくなってしまう。それでも、きつと微笑みかけてくれているのだろうと何となく察することが出来る。

「村を守りたいんですよ。私はとても立派なことだと思いますよ。あなたは紛れもなく誇りを抱くハンターです、ヴァルカン」

そう言い残して、アマランサスは歩き去る。つい霧に隠れて見えなくなるまで見送ってしまった。

不思議と、気分は落ち着いていた。もう泣きたくなくなるようなこともないし、惨めでいたたまれない気分もどこかへ行ってしまった。

腕を頭の後ろで組んで寝転がる。頭上には霧がいまだに立ちこめている。先程まで聞こえていなかった虫の鳴き声がかすかに響いていた。虫の気配に気づくことができたということは、それだけ、余裕ができたということだろうか。

虫ケラ。そんな言葉がある。とるに足らない存在だとかそんな意味だ。でも、すべての虫に絶滅して欲しいなんて人はいないはずだ。

虫がいなければ花は実を結ばない。実を結ばなければ困るのは人間だ。

虫に誇りだとか惨めだとかいう概念はきつとわからない。その代わり蔑むこともない。

今思えば、パーティを組んでいたみんなは決してヴァルカンを馬鹿にすることもなければ除け者にすることもなかった。アイテムを用意してくれて、サポートしてくれると感謝してくれていた。

それを、ヴァルカンは気遣いだと考えていた。本心では臆病な便利屋だと考えてるに決まってると思っていた。実際はどうだったのかわからない。

ただ、一つだけ言えることがある。

「俺のことを一番馬鹿にしてたのは俺なのかもな」

惨めな奴だ。臆病な奴だ。上位ハンターの資格なんて何も無い。こんなことを言っていた奴はヴァルカン本人しかない。

アマランサスは言ってくれた。誇りを抱くハンターだと。では、誇りとは何だろう。どんな強敵にも一歩も怯まず戦い続けること。それもあるだろうが、そんな気概は今のヴァルカンにはない。では、どうしてアマランサスはヴァルカンに誇りを認めてくれたのだろう。

思い浮かべるのははじめてアマランサスの顔。つかみ所がなくておかしな奴でそれでも優れたハンターで、そして、優しい人なんだと思う。

あの人はきつと嘘なんてついていない。飛竜のような強靱さはなくても、草食種には草食種の育む命があるように、自分には意地や誇りはある。

確信が胸に宿ると、後は簡単なことだった。あまりに簡単なことだったので、つい大声を出して笑った。涙が出るくらい笑った。腹が痛くなるくらい笑った。

「簡単なことじゃねえか。俺は飛竜を殺したくてハンターになったんじゃねえ！ 村を守りたいって！ 母さんやみんなを守ってやるうってハンターになったんじゃねえか！」

霧はいまだに晴れる気配がない。それでも、ヴァルカンの瞳から迷いの陰は晴れていた。

包帯を巻いてもらったが、まだ傷は痛んだ。強固な蒼火竜に守られてこれである。如何に人が脆く、モンスターが強大な存在であるか思い知らせてくれる。アレスはまだ立ち上がることができず이었다。

アマランサスはすでに戻ってきていた。若造を慰めに行ったに決まっているが、どんな話をしてきのか何も聞いていない。帰ってくるなりチャチャブーたちが残してガラクタの山を漁っている。いらぬものを後ろへと放り投げているのだが、転がるものを観察するにろくなものはないようだ。

「あまりガキを甘やかすな」

「甘やかしてなんていませんよ」

アマランサスは手を止める様子がない。首を無理に持ち上げていると見えないのだが、それは疲れる。首を戻して天井を眺める。

「あいつはもう駄目だ。ハンターとして一番重要なものが欠けている。村にでも戻って、親方の言うとおり……」

工房の跡を継いだ方がいい。そう言うより先に、いつの間にか近寄っていたアマランサスが怒ったような表情でアレスの顔を覗き込んでいた。

「ヴァルカンは一番大切なものしか持ってません」

「誉めてるのが、貶しているのか？」

アマランサスは途端に微笑むばかりで答えようとしない。答えを聞くことができない代わりに聞こえてきたのは悲鳴と奇声。

無理に体を起こすと、悲鳴を上げながら逃げる若造とそれを追いかける小人の姿を捉えることができた。若造は無論ヴァルカンのことであり、頬が裂け、血が筋となっていた。追い回しているのはチャチャブーである。

チャチャブー。アイルー、メラルーなどと同じく獣人種に数えられるモンスターで子どもくらいの背丈しかない。道具を自ら加工できるほどの知性を持ちながらアイルーたちほど人の社会にとけ込んでいないのはあまりに異なる価値観の持ち主であることと、その凶暴性に原因を見いだすことができる。

今もチャチャブーは決まって身につけている奇妙なお面を頭からすっぽりと被り、包丁をでたらめに振り回しながらヴァルカンを追いかけている。1匹しかいないところを見ると、どうやら気まぐれで古巣を訪れただけであるようだ。

確かに群を構成されると、鋭い包丁は十分な脅威となる。だが、単体ならばそんなに恐ろしい相手ではない。

「助けてやれ」

「は〜い」

手慣れた動きで背中からヘビィボウガンを右脇に構折り畳まれていた銃身を展開する。黒狼鳥の甲殻に包まれたボウガンが火を噴くと、放たれた弾丸はお面の額に正確に撃ち込まれた。チャチャブーは面白いくらいに飛び跳ねて倒れた。しばらく動かないと思うと、ゆっくりと起き上がり、そして全力で元来た道を全力で走り去った。

残されたのは息を切らせて座り込む若造が一人。

「死ぬかと思った……。あいつ、何であんなに攻撃力が高いんだ」

「奴らの包丁はハンターが使う肉厚の刃ではなく、鋭く尖っているからだ」

丈夫な甲殻を有するモンスター相手にも折れてしまわぬよう、大剣や太刀、片手剣と言った武器は斬るといふよりも鋭く叩くといった使われ方をする。チャチャブーの包丁のように鋭利なものを使うと、人間のように薄い皮膚しか持たない生物には脅威だが、モンスター相手にはものの役にも立たない。

さて、こんなハンターにとって当たり前のことを今更教えてやる必要があるだろうか。

「村への帰り方も忘れたのか？」

「んなわけねえだろ。俺はハンターだぜ。獲物もなしに帰れるかよ」

ヴァルカンはまず立ち上がった。その顔には涙の後が残り、ずいぶんとみつともない顔をしている。だが、それでもその顔を隠そうとする気配はまるでない。周りにどう見られようと、どう思われてもかまわない。見栄をはるだとか、自分を大きく強く見せる必要性など感じていない、すがすがしささえ覚える顔をしている。

「まったく女に慰められた途端いっぱしの顔をするようになるとな」

「そんなとこ、昔のアレスにそっくりですね」

もう一〇年近くも前のことだ。何度も蒸し返されてはたまらない。しかし、文句など言おうものならアマランサスの思うつぼである。理屈、屁理屈、そのどちらにしる、アレスに勝算はない。

「おっさん、これやるよ」

ヴァルカンが投げ渡したのは透明な小瓶であった。完全な円柱ではなく三角錐状に徐々に細くなっているもので、普段は生成できる量の少ない貴重な薬品を保管するために用いる。中には黄色い液体。独特の粘性を持つことから、薬の名前は知れた。

「秘薬か。こんなものをどこで？」

回復薬を遙かに上回る薬効があると同時に利きすぎることから一度の使用量が制限されるほどの薬である。マンドラゴラ、不死虫など比較的珍しい素材を溶かし込んでいるため、市販はされていない。

「マンドラゴラが生える場所や不死虫のいる場所くらい、一度回れば見当がつくさ。ま、不死虫は昼間は穴蔵の中だから、ちよつくら面倒だったけどな」

そう言っつて、ヴァルカンは土にまみれた袖口を見せた。素材を採取するとなると樹海を効率的に動かなければならない。ヴァルカンはわずかな観察を元にそれを成し遂げたこととなる。

「いい手を思いついた。村も守つて、自然も守る。そんなすげえ方法だ」

洞窟とは言つても、木々が密に重なつてできた空洞のようなもので、差し込む光は外とさほど遜色ない。ヴァルカンは地べたに座りながら地面に簡単な地図を描く。

これまでいつもこうして枝を拾つては地図を自前でこしらえていた。地形は一度見れば覚えられたし、ギルドの支給品に頼ることはなんとなく格好が悪い気がしていた。あまりに独学というものに頼りすぎていた。

自分の力で得たものの方がさも優れていると錯覚して。

「この森には多様な植物が群生してる。ニトルダケ、火薬草、ツタの葉。それに骨もあれば、ランゴスタだっている」

地図にだいたいの分布を書き込む。秘薬が利いてくれたのか、アレスは特に苦痛を感じる様子なく地図を眺めている。

「何を言っている？」

「言ってる、奴がいるから樹海に大型モンスターが住み着かなかつたつて。逆を言えば奴を狩猟しまうと、このあたりの縄張り争いが激化して村に被害が及ぶこともありうるって訳だ。それならどうすればいいか？ 簡単だ。奴には樹海に残ってもらう。だが、こんな浅いところに出てきてもらっても困る。だからちよつと痛い目みてもらつて奥に引きこもってもらおうぜ」

「なるほど。それなら確かに樹海的环境は保たれる」

「だろ」

得意げに言つてやるとアレスはどこか渋い顔をして、立つたまま会議に参加していたアマランサスの顔を見上げた。今なら何となく、アマランサスが本当に笑つていてくれるのだとわかる。

「どこかの誰かさんの入れ知恵か？」

確かにアマランサスの言葉に影響されたとは言え、それは抽象的なものでほとんど独自に編み出したものだ。もつとも、アマランサスはそのことを見越して最低限の情報に留めた疑いもあるが、それは気にしないことにする。

「俺が自分で考えたんだよ。でだ、とりあえず、俺たちは部位破壊を指さないか？」

杖で、あまり綺麗とは言えないが、ヒブノックの顔を描く。羽毛に覆われた頭部に突き出されたクチバシ。クチバシには横から突起が直角に生えており、まるで牙のように見える牙ハシという部位が存在する。

ヒブノックに限らないが、モンスターはその構造上脆い部位というものが存在する。そこは普通に狩猟していれば傷つき、狩りが終わった頃には使いものにならなくなることが多い。そのため、ハンターたちはあらかじめその部位を集中的に攻撃し破壊することで部位を剥離させる。するとその部位は戦いに巻き込まれることがなくなるため、狩りを終えた後に悠々と回収できる。

それを、ハンターたちは部位破壊と呼んでいる。

「牙ハシは折れやすいし、部位破壊をされたモンスターはその部位が再生されるまで動かなくなる。奴は樹海の奥に戻って、浅いところに出ることも警戒するようになるってわけだ」

ヒブノックの顔に線を引く。それだけで牙ハシはかき消され、部位破壊は完了である。もつとも、ことはそう簡単なことではない。

「だが、俺もお前も攻撃は奴のクチバシには届かない」

そう、今度の相手はでかい。クチバシなど頭上遙か彼方だ。攻撃できるとすれば、ガンナーくらいなものだ。しかし、ヴァルカンがアマランサスを見たのはその攻撃力を期待したからではない。

「アマランサス姉ちゃんは毒弾を持つてるよな」

すでにアマランサスの手には毒弾が握られていた。他の通常弾と区別するため紫色に染められているから一発でわかる。

「ランゴスタの羽根をできる限り集めてくれ。俺は爆薬を作ってる」

「小タルは無理矢理作っちゃいましょう」

やっぱり、アマランサスにはみんなわかっているらしい。まったく、かないやしない。

「何の話をしている？」

唯一わかっていないのはアレス。得意満面で聞かせてやっても許されるだろう。

「仕方ねえな。教えてやるか。打ち上げタル爆弾だよ。小タル爆弾に安定翼代わりにランゴスタの羽根を取り付けるんだ。実際はこんなに単純じゃないが、ともかく小タル爆弾が垂直に打ち上がって、クチバシの高さくらいなら届くはずだ」

羽の取り付け方によってはまっすぐに飛ばないため失敗作になってしまう。また甲中種は脆い体をしているものが多く、通常の手段で狩猟しようとする剥ぎ取る場所さえないくらいバラバラになってしまう。ただし、中毒死してもらえば話は別だ。原形を残したまま討伐できる。そして、小タルも爆薬も自然の中から採取できるので調合してしまえる。

「まあ任せろよ。採取なら一〇〇回はしてる。それに、一通り回ったしな」

「アレスは休んでてください」

洞窟を出ていこうとするアマランサスに付いていく形で移動する。ただ、あと少しくらい聞かせてやってもいいだろう。

「何もモンスター相手に武器振り回してるだけがハンターじゃないってこと見せてやるよ」

アレスは余裕のある顔しながらも、どこかぎりぎりのようで、目尻がひきつっていた。

深い森の中、巨大なヒプノックは東の平原にて、眠りについていてた。翼をたたみ、人の頭ほどの大きさを持つ眼は瞼に大半が多い隠されている。

それが確認できるのは霧が薄れている間だけである。風が吹くと途端に霧が濃度を増し、ヒプノックの巨体さえかすれさせてしまう。

「扱い方はわかるよな、おっさん？」

「アレスだ。一応はな」

呼び方を訂正してから答えたため、おかしい言い方となった。現在、アレスとヴァルカンは大きな葉を粘着草で風呂敷状に加工したものを担いでいた。中には片手で辛うじて掴める程度の大きさをし

た小タルを六、七個。正確にはアレスが七個、ヴァルカンが六個である。ヴァルカンは打ち上げタル爆弾に加工されていない小タル爆弾を一個背負うことでアレルと等量のタルを担ぐ。

一見ただのタルだが、中には火薬が詰められており、わずかな衝撃でも発火するよう乾燥させた火薬草を使つて起爆する小タル爆弾と呼ばれるものである。これはさらに底の部分に細かく加工したラングスタの羽が仕込まれており、点火した火薬草の熱を利用して垂直に打ち上がる仕掛けになっている。

「羽根が足りなくて爆弾の数には限りがあります。ヴァルカン、わかつているとは思いますが、この霧でボウガンの狙いを定めることは無理です」

よつて、アマランサスを頼ることはできない。打ち上げタル爆弾のみが頼りになる。

「では、このクエストのメインターゲットはヒプノックの頭部破壊。失敗条件はヒプノックの狩猟。制限時間はないが、あまり時間をかけるつもりもない」

ギルドが設定したものではないため、非公式なクエストだが、その内容が決定した。

「でかいヒプノックだからデカノックって呼ばねえ？」

「バカを言つな。ビッグなヒプノックなのだ。ビッグノックだろ」

「大きいから、ヒプノック巨大種ですよ」

三人で顔を見合わせて、どことなく誰もが自論を撤回しない雰囲気装っている。結果、アレスは議論を放棄することにした。

「狩りを始めるぞ」

「で、いきなりこれかよ」

いよいよこれから。ヴァルカンがまずさせられたのは、木々に隠れながら匍匐前進をすることである。アレスはヴァルカンに先行し、物音を立てないように進んでいる。背中には山になった風呂敷。正直、異名さえ持つハンターにしては見栄えの悪い格好である。

「奴が動き出す前にできる限り当てておく必要がある。それよりも、次は大丈夫なんだろうな？」

そのために気取られることなく近づかなければならない。そして、それはあの巨大なデカノックの至近距離にまで近づかなければならないことを意味する。ここに意識が及ぶと、やはり恐怖が心を刺す。こんな時、ヴァルカンはいつも強気な態度を維持しようと振舞う。

「剣を手に死闘を演じるなんざ俺にはできそうにない。でも、村を守るためなんだ。これくらいやってやる」

だが、今はこれまでとは違う。いつも無理にでも心を奮い立たせて前に進もうとしていた。でも今は、前に踏み出した足の感触を確かめるような、そんな確かな手ごたえを感じていた。

「では見せてみる、このひよっこ」

やがて、ヴァルカンとアレスはデカノックの傍にたどり着く。真上には霧を透かして見える巨大なクチバシが重厚で頑強な質感を堅持している。まだ気づかれた様子はない。ゆっくり、静かに打ち上げタル爆弾を地面に置く。うまく平らになるように設置して、互いの準備が終えたことを視線のみで確認する。同時にタルの頭を叩く。内部にわずかな衝撃で熱を持つように設えた火薬草が入れられている。衝撃を加えてすぐに、小タル爆弾は綺麗に頭上へと打ち上がった。

霧は原理こそ不明だが燃烧促進剤として機能している。打ち上げタル爆弾のわずかな火花の垂直の軌跡が火を一直線に描く。そして、クチバシに吸い込まれるように小タル爆弾が激突し、爆発する。霧の力を借りて普段以上に派手な花火が咲いた。

轟音に混ざる巨大な鳥の声。これが、クエスト開始の合図である。

## 第六話「創痕の騎士と始まりの始まり」(後書き)

予定では、次話で終了です。ある程度想定していたことは言え、思った以上に地味な戦いになってしまいそうです。

こんなことならはじめから正直にエスピナスか、同じヒプノックでも希少種を出しておけばよかった気がします。

ただ、ヴァルカンがそれではまともに狩りに参加できない可能性がありますから……。

## 最終話「創痕の騎士と巣立ちの時」

静謐な森に爆発音と巨鳥の鳴き声が響きわたる。体にまとわりつく霧は姿を隠し、気配を塗りつぶす。勘とわずかな情報を頼りにアレスは身を翻した。霧が揺らめいたと思うとともに引き裂かれ、巨大な脚が風をまき散らす。

巨大な眠鳥ヒプノック、アレスがビッグノックと呼ぶそれが動く度、霧が吹き飛ばされ、わずかな間だけ十分な視界を得ることができる。

このクエストのメイン・ターゲットは頭部の部位破壊。ビッグノックが動いた後、動きをとめるわずかな隙に打ち上げタル爆弾をその真下に仕掛けなければならぬ。

動き回ることによって霧が晴れてくれるのはありがたい話だが、その度に大地をめぐりながら突き進まれたのではかなわない。デカノックにとってのほんの一步でも、人間の全力疾走でさえ追いつけないほどの距離を開けてしまう。

「でかいと言うことがこうも面倒だとはな」

しかし、動きそのものは通常の大きさのヒプノックと変わることはない。デカノックが羽根を震わせた。震えはやがて羽根から体に伝わり、太い首が持ち上がる。睡眠液を放とうとしている。これまでに何度も見てきた動きだ。ヒプノックは睡眠袋から液を飛ばす際、必ず前方に着弾させる。ヒプノック自身、麻酔作用に対する耐性がなく自爆を避けるための処置なのだろう。

活路は前にある。アレスは手に打ち上げタル爆弾を抱えながらデ

カノツクの懐目指して走る。

巨大な体から放たれた大量の睡眠液は着弾するなり膨大な睡眠ガスとして気化する。アレスの鼻に甘い、甘ったるい香りが届く。だが、ビグノツクの足下にまで届く頃にはすでに十分に拡散している。

打ち上げタル爆弾を地面に叩きつけるように置く。この衝撃で内部の火薬草が着火し、1秒とかならずタルが真上に打ち上がったいく。そこにはビグノツクの巨大なクチバシ。

霧を飲み込み爆発力を増す小タル爆弾。その熱は離れた場所にいるアレスにも伝わってくる。爆発に霧が消費されたことでほんの一時だけデカノツクの顔が明らかとなる。クチバシが黒こげ、牙のように生えた突起物にはかすかなひび割れが確認できる。

だが、まだ折れる気配がない。

「おっさん、あといくつある？」

耳に届くのは大声。ヴァルカンは近くにはいないらしい。もっとも、近くにいたところでこの霧だ。満足に姿など見えない。

「一つだ、おまえは？」

「あとはただの小タルしかない」

途端に声が小さくなる。姿など見るまでもない。また臆病風に吹かれたのだろう。つい先程まで動くことさえできなかったことに比べればマシだが、勇気というものは一朝一夕に身に付くものではない。

また霧が揺らめく。この霧の中では攻撃に移るわずかな間だけ、敵の姿が明らかになる。また睡眠液を放とうとしているらしい。だが、狙いはアレスではない。かわしておけよ、若造。そう心で念じながら、アレスは素早くクチバシの下へと打ち上げタル爆弾を設置する。

打ち上がる火花。クチバシは確かにくすぶり、牙ハシは今にも折れそうである。だが、決して折れてはいない。

すべての打ち上げタル爆弾が尽きた。目標ははるか頭上にある。

さて、今頃ヴァルカンはどんな顔をしているのだろうか。やっぱり俺には無理だと震えているのか。それとも、今頃一目散に逃げ出しているかもしれない。

奴は臆病だ。自分よりも弱いとわかった相手にしか虚勢をはれない。安全な相手だとわかれば途端に強気になる。今の今までハンターを続けてきたことが不思議なくらいの臆病者だ。

だが、そんな意気地なしはそれでもハンターをやめようとはしなかった。

ハンターにとって最も大切なこと。それは自身の後ろにあるものに、自身が背負うものに責任と誇りを持つということ。ヴァルカンにはそれがあると、アマランサスは言いたいのだろう。

背中からランスを取り出す。邪魔で仕方なかったタルは今やない。青い槍、ブループロミネンスの蒼火竜の鱗に覆われた刀身が霧を払う。

惚れたよしみだ。もうしばらく、アマランサスの戯れ言に付き合  
ってやるとしよう。

「奴は俺が引き倒す。お前はその隙に頭部に小タル爆弾を仕掛ける  
！」

返事は待たない。すでに霧の先、かすかな揺らめきが突如突風の  
ように押し寄せる。ビッグノックの蹴り。足を突き立て、体を小さく  
固める。蒼火竜の尻尾を模した盾が大きな音を立ててその蹴りを受  
け流す。

手が痺れる。勢いを殺しきれなかった足は、背の低い草を踏みつ  
ぶしながら後退する。衝撃を体全体で受け止めるよう工夫されてい  
るはずのリオソウルを持ちても衝撃を消し切ることができない。ま  
さに規格外の化け物である。

だが、利点は必ず欠点に通じる。霧の中、悠々と方向転換するビ  
ッグノックの姿があった。大きいということは、それだけ小回りがき  
かないということだ。

まだ手の痺れはとれていない。足とて震えが生じている。やれる  
か。そう自問する時はいつも、やるしかないと自分を奮い立たせて  
きた。

それは若造も同じだろう。

「……わかった、俺がやる！」

今頃になって返事が届いた。無理に腹に力を込めたような声に、

つい苦笑させられる。

できるものならしてみせろ、このひよっこ。

霧を振り乱してこちらを振り向こうとするビッグノック。その左足を捉え、アレスは駆け出す。

腰を低く、足は力強く。ランスを水平に構えたことで極端に乱れた重心のバランスさえ突進の糧とする。機動力に乏しいランスの最速にして最強の攻撃。

刺す、突く、貫く。

踏みしめる度に土が弾け、筋肉が悲鳴を上げる。そして、前へと突き進んでいく。ランスの穂先が霧を裂き、そしてビッグノックの左足へと突き刺さる。

舞い踊る火花。

眠鳥ヒブノックの体毛は分厚く強固で、刃を容易には通さない。ブループロミネンスは毛に囚われるばかりで大木のように太い脚そのものには届いていかない。だが、アレスは突進を続ける。踏み込み続ける。

ブループロミネンスの刃に仕込まれた火竜の骨髄。空気に触れると発火する危険物は普段刃に包み隠されている。しかし、ランスを突き立てることで一部の可動式の刃がスライドし、骨髄へと大気を送り込む。すると火が吹き出す。

アレスが攻撃を続けるだけ、刃が体毛に食い込んでいる間、大気

を吸い込み、霧を食らう炎はビッグノックの脚を攻め苛む。普段ではあり得ないほど大きな爆発が幾度生じ、炎はアレスの体にさえ吹き付けられる。

それでもアレスは耐えた。蒼火竜の甲殻は熱に強い。火竜が火傷で死ぬなど、魚竜が溺れ死ぬほどみつともない。そして、ここでビッグノックを倒さねばこのクエストは失敗する。

身を焦がす炎と、手に伝わる重く堅い手応え。これらは、攻撃が届いていないことをアレスに伝えていた。

諦めた訳ではない。折れた訳ではない。アレスは一際強く大地を踏み、体を押し留める。すぐに消えるはずのない突進の勢いをランスへと乗せて、渾身の一撃を突きだした。

爆発と、より深く体毛に突き刺さるランス。だがそれでも、攻撃は届かない。

駄目か。諦めではなく事実として目の前の現実を受け入れようとした時、耳にかすかに届いた風を裂く音。そして、生じた大きな爆発。体毛が焦げる臭いとは別のものが鼻を撫でた。

ビッグノックは悲鳴を上げたかと思うとその巨体を大きく傾かせ、そのまま倒れていった。

アマランサスの仕業だとすぐに気づいた。狙いはつけられないと言いつながらこの精密な援護射撃。まったく女というのはどうして男を騙すことを生き甲斐とする生き物なのだろうか。

戦いから遠く離れた場所で、アマランサスはヘビィボウガンを背中へと戻している最中であつた。

この場所からでは霧が濃く、ヒプノック巨大種の姿は断片的、それも不鮮明にしか見ることができない。アマランサスにはそれでも十分であつた。一部でも見えるのであれば全体像を正確に把握できる。霧は何の障害にもなりはしない。

倒れてもがくヒプノック巨大種の姿。それはわずかに翼の先が見えているだけであつたが、アマランサスの頭の中では完全な像として霧の向こうの姿を捉えていた。

姫様から認められ、凶眼と恐れられたアマランサスの力。

ただ、今この力は必要ない。

ヘビィボウガンは背中に戻してしまつた。手にはまだ未使用の火炎弾が握られている。赤く塗装されたそれは、目標に着弾すると炎をまき散らす。そして、その目は倒れたヒプノック巨大種のクチバシを見えずとも見ている。

それでも、力が必要ではない。

アマランサスは火炎弾をポーチへと仕舞い込む。

「ヴァルカン、あなたは強い子ですよ。だって、自分の弱さに向き合つて、ちゃんと一人で立ち上がってきたじゃないですか」

だから大丈夫。ヴァルカンはもう歩いていける。前へと、先へと。

巨大な柱か、巨大な樹か、巨大な何か。ともかく、デカノックは巨大なものにしか例えようがない。とてつもなく大きくて、脚をとられて転んだだけでも大地が震えた。

その振動はヴァルカンの足にまで伝わってくる。それは嘘だ。確かに揺れは感じている。だがそれ以上に、足が震えてとまらない。

じたばたと暴れているため、デカノックの姿は薄紙一枚を通して見るようながらも全体が見えている。リオレウスなんて比ではない。火竜なんてデカノックの顔くらいの大きさしかないのではないだろうか。人一人なんて簡単に丸飲みしてしまえるくらいに大きいクチバシが横たわっていた。

怖くないはずがない。恐ろしさに震えない理由がない。逃げ出してしまったならどれだけいいだろう。元々バカな話だった。人の両手で簡単に抱えてしまえるくらいちっぽけな爆弾でこんな巨大な鳥竜を相手にするなんて。

「俺は……」

たとえ小タル爆弾を仕掛けられたところで部位破壊ができる保障もない。

みんな知ってることだ。臆病者のヴァルカン。まともに武器も握れず、飛竜を見ると震え出す。

でも、あの人は言ってくれた。ヴァルカンもハンターなのだ。

何度も逃げた。何度も怯えた。それでもハンターであることだけはやめなかった。

「俺は、俺はハンターだ！」

怖いに決まってる。逃げ出したいに決まってる。でも、それと同じくらい、いや、それ以上に逃げ出したら駄目だと知っている。

ヴァルカンは走った。デカノツクの巨大な顔が見る間に近づいてくる。人の頭ほどの目がヴァルカンを睨む。一瞬足から力が抜ける。それでもヴァルカンの背中をそっと押してくれたもの。それは意地でもなくて、見栄でもなくて、もしかしたら人が誇りと呼ぶべきものなのかもしれない。

もはやクチバシは目の前にある。目標とする牙は手の届く場所にある。

ヴァルカンは跳んだ。本来、小タル爆弾は地面に設置して扱う。そうでなければどんな方向に爆発するかわからず危険きわまりないからだ。それでも、ヴァルカンはあえてセオリーを破った。小タル爆弾を直接牙へと叩きつけた。

小タル爆弾は構造上衝撃では爆発しない。鋭く伸びた牙に、中に火薬草の粉末を満載にしたタルが突き刺さる。

そして、霧が一瞬タルに吸い込まれて、大きな爆発が起きた。人の視力では爆発の瞬間を捉えることはできない。ヴァルカンは何がどうなったのかを確認するよりも先に、爆発の方から飛んできた何かをまともに食らった。痛いだとか何だとかわからない。

「ぐえ」

まず背中から叩きつけられて飛び跳ねる。

「ぐりゃ」

うつ伏せに叩きつけられると、今度は跳ねることなく地面を転がっていく。きつと五回転くらいして、ようやく体が仰向けの状態で止まることができた。

「頭から頭痛がして痛い……」

感覚が遠い。起きあがろうにも体が重い。視界が白いのは、ただし霧のせいだ。目は思いの外よく見えている。だから額に傷を負った男がこちらに手を差し出してきたのはよく見えていた。

「よくやったな」

アレスの顔は、心なしに笑っているようにも見える。

「お前が大切そうに抱えてるものを見てみる」

抱えている、何を。

無理に体を持ち上げて、自分の胴体に目をやると、見覚えのないものがのっかっていた。褐色で独特の光沢。細く長い突起状で、ちようどヴァルカンの胴体ほどもある。

いや、見覚えはある。ただし、これは普通もつと小さなものだ。

そう、普通のヒブノックなら片手で掴めてしまえるくらいの大ささ

しかない。

これは、デカノツクのクチバシ、牙ハシであった。立てないわけだ。これだけ大きければ重いものだ。それでも、何を持っているのかさえわかれば抱えて立ち上がるのはたやすい。

改めて手にすると、それは腕に食い込むように重い。それを、ヴアルカンは両手で頭上に掲げた。

「よつしゃあああああゝ！」

クエスト達成である。デカノツクを狩猟してしまうことなく頭部の部位破壊に成功。これでデカノツクは樹海の奥にこもり、人里近くにまでやってくることはなくなる。

何より、自分の力で成し遂げたことが嬉しい。飛竜から逃げ出すしかできない臆病者が、仲間の影に隠れていることしかできなかった弱虫が、それでも成し遂げることができた。村を守ることができた。

別にこれが初めてのクエストというわけでもないのに涙が出てくる。

「泣くのは後だ。今は、逃げるぞ」

「へ？」

涙が溜まった目のままでアレスの方を向く。

デカノツクがいつの間に関に立ち上がったのか、足踏みをしていた。

片足でほんの少し地面をかくだけで一人を簡単に埋めてしまえるほどの土砂が掘り起こされる。その目はヴァルカンたちを見下ろし、穏やかな光を放っていた。怒っているようにしか見えない事実に目をつぶり、現実逃避が許されるなら、デカノックは怒ってない。

霧の向こう側を、アマランサスの目は捉えていた。

雄叫びやら悲鳴を上げながら逃げ回る男が二人と、睡眠液を吐き散らしながらそれを追いかけて回すヒプノック巨大種。これは振り切るまでしばらく時間がかかりそうだ。

アマランサスが近くにあった倒木に腰掛けると、ちょうどその時、ヒプノック巨大種が巨木を叩き倒した。

「死ぬ！　死ぬ！　これ死ぬって！」

とても死にそうには思えないヴァルカンの元気な声が聞こえる。

この少年はとても頑張った。本当は逃げ出したいくらい怖かったはずなのに、それでも勇敢に立ち向かった。それは無謀でも強がりでもなくて、確かな能力と、そして少しの自信のなせる業。

ヒプノック巨大種が跳ぶ度、若者の悲鳴が聞こえる。

何かご褒美でもあげようとポーチを探る。すると、とても高貴、そんなガラクタが見つかった。細長い金属の板二枚を交差して重ねて、そこをビスで止める。さらに両方の板の先にさらに別の板を重ねる。新しい板同士をさらに交差してそこをまた止める。こんなこ

とが四回ほど繰り返されたものである。これはなんとも不思議で、手元で交差を横に潰すように動かすと構造全体が縮み、縦に伸ばすと構造もまた伸びた。

チャチャブーのところから持ち出したもので、使途なんてわからない。ただ何となく至高っぽくて、面白そうなガラクタだったので持ってきた。

これをヴァルカンにはあげよう。さてさて、喜んでくれるだろうか。

ンガイ村の酒場はいつにも増して盛況であった。普段の喧噪に加え、今日は主役を迎えているのである。

「奴の大きさは見上げるほど。一度羽ばたけば嵐かと思うくらいの風が起きた。その鳴き声はそれだけで森の木々を揺らしたほどさ」

主役は酒場のほぼ中央に位置するテーブルをステージ代わりに熱弁を奮う。如何に困難な相手であったのか、どれほど恐ろしい相手であったのか、多少の誇張を交えながら。

「だが、でかいモンスターを狩るだけがハンターじゃない。優秀なハンターは全体を眺めて行動できるもんだ。奴を倒せば樹海の縄張り争いが激化する。そうなれば村に危険が及ぶ可能性が高い。そう考えた俺は奴に少々痛い目にあってもらうことにした」

居並ぶハンターたちは下位の者が多い。それだけ若く、中には大型のモンスターを相手にしたことがない者もいることだろう。多く

がヴァルカンの話に目を輝かせて聞き入っていた。

「クチバシをへし折ったんだよ。そうすりゃ、奴は森の奥から当分出てこないし、そうそう村にも近寄らなくなる」

十分な興味を引きつけてから、ヴァルカンはおもむろにテーブルに布に巻かれて置かれているものに手を伸ばす。布を払いながら、それでもギャラリーには見えないよううまく工夫して、ヴァルカンは巧妙な演出の元で一気に牙ハシを掲げた。

「で、これがその戦利品てわけだ」

その大きさに、ヒプノックを目にしたことのないハンターでさえ一様に驚きの声を上げた。そんなハンターたちの様子に、ヴァルカンは満足気に胸を張っていた。

そんな若者を眺めるハンターが二人。酒場の隅に陣取り、テーブルに対面する形で腰掛けている。

「結局何も変わっていないな、あいつは」

「ヴァルカンは頑張りましたよ」

アマランサスはいつものような笑顔。ジョッキを傾けて苦い顔をしているのはアレスである。無論、酒に酔っているわけではない。

「いつからだ。あいつがアイテムの扱いに慣れてると気づいたのは？」

「採取が上手だったじゃないですか。ランゴスタだって、慣れたハンターでも刺されることは珍しくありませんよ」

「モンスターを狩るだけがハンターではないか。まさかあんなガキに教わることもあるなんてな」

アレスにとって、モンスターは真正面からねじ伏せるべき相手であり、まさかアイテムをメインにクエストを攻略できることがあるとは思ってもしなかった。できるといふことは言い換えるならできてしまうということ。別に工夫や思考を凝らす必要がない以上、新しい手段や方法の模索がおざなりになる。力押しが通用している時はいいが、より強大な相手が現れた時、最も脆いのはアレスのようなハンターであるのかもしれない。

もっとも、テーブルの上で得意気なヴァルカンの様子を眺めると、どうにも認めてやる気にはなれない。

「この度はありがとうございました」

アレスたちが座るテーブルに近づいてきたのはユーノー村長であった。相変わらず油断のない様子でありながら穏やかな雰囲気崩さない。ヴァルカンは父親似的だろうか。母親であるはずのユーノーとは相変わらず似ていると感じることはない。

わざわざ立ち上がって出迎えるまでもないだろうと、座ったまま受け答える。

「いえ、ご子息は、思ったよりも勇敢でした。確かにまだ一人で動くには不安がありますが、いえ、誰かと組んだ時にその真価を発揮

するタイプでしょう」

認める認めない以前に、事実を述べただけのことだ。

「ところで、この一帯に霧が発生することは頻繁なことでしょうか？」

「いえ、まったくということはありませんが、そんなに頻繁というほどでは」

これはヴァルカンも言っていた。そもそも、助燃性の霧など聞いたこともない。異常事態であることに違いはなかった。

ユーノー村長はヴァルカンに呼ばれるや、簡単な立礼を済ませてから息子の方へと歩いていった。まったく、まだ乳離れできないガキであるようだ。

もっとも、男なんてものは母親によく似た女性をパートナーに選ぶという話もある。母親から離れても恋人なり妻なり、結局何かするものを絶えず求めるものなのかもしれない。そんなことを考えているのではないだろうか。アレスの顔を見るアマランススの顔は、いつもどおりの微笑みに、何か得体の知れない空気を含有しているように思える。

「……やはり、何かが起きていることに疑いはないな」

無理にでも話を変えようとする、アマランススはテーブルの上に地図を広げた。この準備周到さ、アレスの周りの女性は誰一人として油断ならないものばかりであるのは気のせいだろうか。

「皆さんが調べてくれました」

皆さん。アマランサスが義理の姉妹の契りを交わした六人の女性たちのことをさす。誰もが優れたハンターであり、アマランサス同様、続発する異変の調査に当たっているはずだ。

地図にはいくつもの印が記載されている。中にはアマランサスが二頭のディアブロス亜種を狩猟した際壁画を確認した地点が含まれている他、ドンドルマの街を襲ったシエンガオレンのこと、さらにアレスの預かり知らぬいくつもの印がある。全部で一〇ほどであろうか。それは完全ではないものの、円を描くように点在している。この度の樹海での一件も例外ではない。

異変が示すのは円の中心で何かが起きているということ。

「ここには何がある？」

地図を指差す。

「ドリームランド峡谷ですよ。姫様のことですから、もう手は打っているでしょうけど」

窓にはすべてカーテンが敷かれ、日の光が謁見の間に立ち入ることとは許されない。不必要に広く、高く、部屋の中央に置かれた玉座は背もたれが遥か高くにまで伸びていた。何も巨人が座るわけではない。椅子そのものは人が座る程度のもの。

そして、そこには少女が一人、肘掛にもたれかかって座っていた。

まだあどけなさを残すその顔は、不遜とも妖艶とも言える笑みを浮かべている。その少女が白いドレスを着ていることを示すのは、蠟燭の細い灯りだけである。そんなか細い光の中でさえ、その少女が長い白い髪をしていることを、白い肌をしていることを、何より赤い瞳をしていることはその存在を主張して譲ることはない。

玉座に座る少女に謁見するのは女性。固い靴音を響かせながら玉座の前に現れると、澀みない動きで跪く。まだ若い女性である。しかし表情に乏しく、その顔は威厳にも近い厳格な雰囲気を感じていた。玉座の上で、少女は楽しげに笑う。

「スノードロップ特務騎士。あなたは私のこと嫌いかしら？」

「はい。あなたは私の大切な人を奪いました。それも、単なる興味本位で」

部下の齒に衣着せぬ発言さえ、少女は笑う。スノードロップ特務騎士の声に怨嗟の響きが込められていることなど構いもしない。

「それでも私に仕えるのはどうして？」

スノードロップは務めて平静を保つ。跪く姿勢は乱れることなく、かしく様子は敬虔でさえある。

「それがお姉さまの意志であるからです」

もう飽きた。そうとでも言いたげに、玉座の少女は軽く息を吐く。そして、排出した以上の息をその小さな胸へと吸い込んだ。

「健気なものね。ではミスカトニック王国第二王女セントポーリアの名において命じます。ドリームランド峡谷を調査し、異変の原因を突き止めなさい」

その赤い瞳に静かな色を宿して、セントポーリアはその手を払う。揺らめく炎が闇を干切る。それはセントポーリア王女の手によって撫でられ、スノードロップへと降り注いだ。

## 後書き

第二章も終了です。如何だったでしょう？

樹海で、モンスターハンターフロンティア限定のモンスターということで、今度こそ真面目な狩りをしようとしたのに結局遊んでしまいました。

どうやら私には着眼点の違うということを、奇をてらうことを捉え違えている節があります。

また、以前レポートでこんなことを言われたことを思い出しました。君のレポートは確かに内容が悪いとは言わない、だが、前書きの部分が長すぎて重要な部分が短すぎる。

……自分でもまさかこんなに戦闘シーンが短くなるとは考えてませんでした。

ただ、今回はクエストが大変特殊です。特殊なら特殊なりにその理由付けに尽力した結果こんな形になりました。世界観を書き進める度、周りの人との乖離が目に見えて、その、辛くなった時期もありました。皆さんのギルド、私ほどの場合ほど組織力が強くないので……。

他には、もともとこのお話はアレスとヴァルカンの師弟を中心にした物語にするつもりでしたが、少々ヴァルカン少年の印象が悪いと指摘されてしまったことから途中で少々舵を切りました。その結果、アレスがあまり目立たないことに……。

まあ、この作品はあくまでも主人公と設定されている人物とお話の中心人物は違うという設定で進んでいます。第一章ではアマランサスのことがタイトルに使われていますが、実質的なお話はティルテュというハンマー使いの女性とその父親との確執がメインでした。

第二章では、家では主導権を握りたがる父親に、反抗期の息子、

二人の間に入る母親の家族の群像劇でした。……こんな風に見えませんか？

ともかく、この話では武器を振り回してばかりではつまらないので何かアイテムをメインにしたお話を考えてみようとした結果、このようなものになりました。打ち上げた爆弾はいいですよ。アクラ・ジエビアを相手に血晶石の部位破壊に連続して打ち上げるのが好きです。最も、大タル爆弾と違い数持ち込めますので、現地調査なんてしたことありません。

さて、今回、樹海、フロンティアで、巨大なヒプノックを登場させてしまったわけですが、すいません。本当ならヒプノック希少種とか、エスピナスを登場させるべきだと思います。

ただ、ヴァルカンははじめから単純な戦闘能力で上位のハンターになったわけではないという設定がありました。無理、なんですよね、そんな大物と戦うのは。

そう言えば、六話を書いている時に気づきましたけど、樹海の昼つて、雨降ってませんでしたっけ？

これは余談ですが、フロンティアでは2Gなどと違い、ハンターランクは次々と上がっていきます。受けられるクエストの詳細は別れるのですが、大別すると三つの区分しかありません。1〜30が下位。31〜100が上位。101〜が便宜上凄腕と呼ばれます。

ただ、私の設定ではハンターは上位まで。凄腕のハンターは存在しません。よって、上位ハンターはどこに行っても通用するくらい優秀なハンターであることを意味します。これは一応意味があるのですが、今はそんなおかしな設定にしてるんだくらいでいいです。

さて、第二章はこれで終わりです。すでに第三章は大まかなプロ

ツトは組んでいます。最後にちょっとだけ出てきたスノードロップが主役です。もちろん、主役ではあっても話の中心ではありません。第一章では遊びすぎて、第二章では変化球にこだわりすぎたため、第三章では戦いをメインにした正統派のお話にしたいと考えています。

舞台は峡谷。フロンティア限定の地形で、高地の乾燥した大地のような場所です。ここには舞雷竜ベルキュロスや茶棘竜エスピナス亜種、金獅子ラージャンに、呑竜パリアプリアが登場します。ラージャンは少々戦闘力や技が奇抜すぎて世界観にそぐわない。パリアプリアはどちらかと言えばトリックスター。エスピナス亜種は、樹海で原種を出さなかったのに今更。そんなわけでベルキュロスを登場させようと考えています。

また、活動報告のコメントで乱戦をと言ったご意見があったため、他にも2体ほど本来は峡谷にいないはずのモンスター、もちろん大型種を登場させて激戦を描くことが当面の目標です。

予定では大剣や太刀と言った武器がようやく登場します。ともかくこれまでは登場人物の実力やら設定やらで抑えがちでしたが、今度は戦いに次ぐ戦いがテーマです。

では、お読みくださった皆様に感謝の意を表明して、あとがきを終わりたいと思います。第1章の時も書きましたが、感想、ご意見募集ですので、一言でも、批判、反論、否定的な意見でもいいのでお気軽にどうぞ。

第三章はまだ未定ですが、「孤高の射手、峡谷を穿つ」、こんな感じのタイトルになりそうです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037m/>

---

MONSTER HUNTER第二章～創痕の騎士、樹海を駆ける～

2011年3月23日12時11分発行